ちょっと小話

Prestigious Hotel 一流のホテル

私はprestigious hotelが好きである。prestigiousは「一流」とか「由緒ある」という意味であるが、由緒あるホテルと聞いて泊まってみると、今にも壊れそうなエレベター。荷物を運ぶベルマンに"Is this (elevator) broken?"と尋ねると"No, madam. It's just old."と返ってきた。場所はスコットランドのエジンバラ。「さもありなむ」と言ったところか。

海外に行くことが多いので、様々な国のホテルを経験してきた。学会などでは最初からあまり期待していないビジネスホテルに泊まるが、旅行するときはせめて、高額でもリッチな感じでリラックスできるところがいい。ゴルフもしないし、これぐらいにお金をかけてもと、自分で言い訳をみつけなければ泊まれない状態がちょっとさみしい。

さて、ホテルの部屋に入るとまず猫のように全部をチェックする。ホテルでくつろぐためのインフラストラクチャーのチェックである。ミニバーがあるか、コーヒーや紅茶の用意があるか。クローゼットの中に、ローブがついているか、スリッパがあるか、アイロンやアイロン台もあるか。コンピュータの接続があるか、部屋のすべての電気がつくか、バスルームのタオルは十分か、ドライヤーは何ワットか。洗面台にシャンプーからシャワーキャップまであるか。お湯はちゃんと出るかなどなど。考えてみるとメイドや旅館の女将とたいして変わりはない。次にテレビをつける。まずニュースと天気予報。英語の番組はいくつくらいあるか。映画のステーションは入っているか。どの国でもCNNはやっている。BBCも多くの国で入っている。ついでにその国では何ケ国語で放送しているか数えてしまう。単に職業病。

さて、ミニバーへ。水のほうがビールより高いことが多い。よってペットボトルを持参してくることもある。どうせ高級感を楽しむなら、水ぐらいけちけちしなくてもと思うが、水に酒より多くお金を払うことが許せないのである。

ホテルの案内でルームサービスの時間やマッサージがあるかないかチェック。館内のラウンジバーは何時までやっているか。プールやフィットネスはあるか。ここまでは着替えもせずにやってしまう。ようやく、"freshen up"するためにシャワーを浴びて備え付けのローブを着る。このローブが高級ホテルになればなるほど生地がよくて分厚く、大きい。私のように小柄の者に合うサイズにお目にかかったことがない。毎回、今度は合うかと着てみるが、だめ。重くて肩まで凝ってくる。仕方なく脱いで、持参の部屋着に着替える。一応、目覚まし時計もチェックする。これがまたホテルによってシステムがちがうので仕組みが分かるまでに時間をとられ、結局はwake-up callをフロントに頼んでしまうはめになる。ちなみに、最近のwake-up callはほとんどが電話の自動録音である。寝ぼけているので、録音に"Thank you."とか言ってしまって間抜けな状態で起きることが多い。最後に、就寝準備として乾燥しきっている部屋の絨毯に少し水をまいたり濡れタオルをかけたりして完了。Beauty sleepに入る。

たしか、ホテルにリラックスに来たはずなのに。いや今から数日間、ていたらくに暮らすための準備なのである。未だにここが一番と思ったホテルはない。それを楽しみに今年もまた、海外へ出かけることになるであろう。全く、商売を間違えたようだ。

経済伊曾保物語

西部 忠

第❶回 隠喩としての「経済」

「経済」とは一体なんでしょうか。経済というと、一般にはお金に関することや、人々の生活に関係のある物質的な事柄を指していると考えられるでしょう。あるいは、経済といっても、少し抽象的すぎて、何のことかわかりにくいと思うかもしれません。

新聞を開いてみれば、失業率の増加とか、景気動向指数の低下とか、マネーサプライの増加とか、日経平均株価の最安値更新とか、経済にまつわるさまざまな出来事が数字とともに報道されています。経済とは、まずはいろいろな経済指標やデータにより成り立っている世界です。GDP、価格、金利、為替相場、株価など……これらは、すべて「数」により客観的に表現されるのです。したがって、経済とは、なにかカッチリとできあがっている、堅く無味乾燥な世界であると考えられがちです。

しかしその一方で、経済は常に万華鏡のように変化する世界でもあって、決して留まることを知りません。景気が良くなったり悪くなったり、バブルが膨らんだり破裂したりと、経済は絶えず変動を続けています。また、ソ連や東欧の社会主義経済が崩壊したときのように、金利、物価、為替といった経済的数量だけでなく、経済を成り立たせている大きな枠組やしくみそのものが、古いものから新しいものへと移り変わることもあります。経済は、目に見える数字上の変化のみならず、目には見えない経済の構造やシステムのダイナミックな変化をも伴っていて、必ずしも数字では表せない側面があるといえるでしょう。

経済とは何か、これを一言で言い表すことは容易ではありません。経済は日々私たちの生活を取り囲んでいるにもかかわらず、いざそれを言葉にして説明しようとするとうまく表現できないものです。実際、経済に関してはいろいろな説明の仕方がありえます。巷にあふれる経済や経済学についての解説本や注釈本は、ほとんどが経済学の教科書の薄められた要約や断片的な知識の提供に終っていることが多く、経済とは何かという問いにまともに答えてくれそうな本を見つけることは難しいでしょう。経済学をとってみても、経済とは何かについて、いろんな見方があるにもかかわらず、特定の見方にのみ基づいて経済を解説しているものが多いですし、そ

もそも、経済学とは経済についてのある特定の見方を教えるものだということを述べているものはほんのわずかです。

「市場」のイメージ

現代の経済は、「市場」というメカニズムを通じて形作られているということは誰でも知っています。だから、私たちが知っている経済とは市場経済のことだといってもいいかもしれません。しかし、今度はここでいう市場とは何かについて、いざ説明しようとすると誰もがとまどってしまうのではないでしょうか。

試しに、いま「市場」といったとき、自分の頭の中にどのようなイメージが浮かびあがったかを考えてみてください。「四日市」や「八日市」といった地名にも残っているように、かつて日本の各所でひらかれた、一定の期日に一定の場所で、いろいろな商品を持った人々が集まり、売買が行われていたイチをイメージしたでしょうか。あるいは、立会人がいてセリを行う株式市場や青果市場のような、取引所タイプの市場でしょうか。それとも、丸いテーブルを囲んで何人かが、受話器を耳に当てながら、叫び合ったり、紙を投げたりする外国為替市場の様子でしょうか。はたまた、電気信号が飛び交うことによって金融上の決済が行われるコンピュータ・システムでしょうか。ひょっとすると、もっと日常的な風景、たとえば、八百屋や魚屋のように野菜や魚という特定の、しかしいろいろな種類の品物が並んでいる店先や、デパートのようにありとあらゆる商品がこぎれいに陳列され、買い手の心をくすぐる大規模な小売店舗でしょうか。もしかしたら、かつて経済学の初歩として習ったあの需要・供給曲線のダイアグラムだったかもしれません。

確かにこれらのどれもが市場です。ちょっと考えただけでも、市場のイメージはさまざまで、経済学の教科書が教えてくれる画一的なモデルにはおさまりそうにありません。少なくとも、市場には、さまざまな目的や仕組みを持った何種類かのタイプがありそうだということはいえそうです。われわれがその中で生活を営んでいる市場経済にも、実に、さまざまなタイプの市場が存在しているのです。とりあえずここでは、多様な財・サービス、つまり、商品が売買される「場所」が市場であると考えておけばよいでしょう。もちろん「場所」といっても、「市場（いちば）」のような、どこかに存在する物理的な場所である必要はありません。インターネット上のオークション・サイトのような抽象的、比喩的な場所でもいいわけです。つまり、「市場」もある種の隠喩であることが理解できるでしょう。経済とはカッチリしたものではなくて、もっとぼんやりとして移ろいやすい、どちらかというと人間的な世界です。それは、私たちの理解によっていろいろなとらえ方ができるし、私たちの考え方次第でそれを変えることができるような世界なのです。

経済は生き物である

経済とは手で触れるモノでも、目に見えるカタチでもありません。むしろ、人間

■西部　忠（にしべ まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

の認識を通じて生じる、あるまとまりをもった仕組みでありシステムです。経済は、市場というメカニズムによりわれわれの生活が形作られ、うまく調整されるようなシステムであり、それ自身のしくみや営み、そしてリズムを持っているというように考えてみて下さい。いわば経済を、骨や内臓、血により構成された肉体や脳を持ち、動き回るある種の生命として想像してみるということです。この奇妙な経済という生き物を理解するには、いろいろな側面やレベルから見ていかなくてはなりません。

今から100年ほど前に、あの有名なイギリスの経済学者ケインズの先生にあたるマーシャルは、経済学者にとって重要なのは「経済動学」ではなくて「経済生物学」だといっています。経済は機械じかけの精密な装置のように動き、変化するものではなくて、いろいろな器官が有機的につながり、成長したり、発展したりする生物のようなものとして考えることがより真実に近いということでしょう。また、同じ頃、アメリカの経済学者ヴェブレンも、経済学は進化的科学だと考えていました。当時主流の（そしていまもそうですが）新古典派経済学は、経済を天体の運動を扱うニュートン力学と同じような理論で説明していました。しかし、そうした機械論的な発想では経済は理解できず、生物学の進化論のように、経済を多様な種の共存と選択の過程で進化すべきものであると考えるほうがよいということです。もちろん、彼らの着想はなかなかすぐれたものでしたが、時代に先駆けすぎていたのか、それが実際の経済学として生み出されることはありませんでした。しかし、ここ20年ぐらいの間に、経済を進化システムとして理解しようとする進化経済学が欧米で注目されてきており、現在発展しつつあります。

マーシャルやヴェブレンのように、経済の成り立ちやしくみを生命や進化という観点からとらえるためには、さまざまな比喩や寓話で考えてみるのが一番です。どのような種類の市場によって現代経済は形成されているのか、なぜお金が使われるのか、価格とは何なのか、金利とは何を表しているのか。これから、こういった疑問から出発して、薄暗くて迷い込んでしまいそうな経済の森の中を探検していきます。さまざまな「陰喩としての経済」を発見しながら、「市場」、「お金」、「価格」、「金利」といったキーワードの意味を探っていくつもりです。必ずしも経済の専門家が必要とする経済の具体的メカニズムを解説したり、経済学の要約を与えようとするつもりはありません。むしろ経済というものをもう少し大きくとらえて、その現実の姿に対するさまざまなイメージをふくらませながら、経済の森を散策してみようと思っています。そうすることで、私たちが毎日つきあっていかなければならない経済という生き物の特徴と生態をいくらかでも理解することができるでしょう。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❷回　はじめに貨幣ありき

市場とは、貨幣によりモノやサービスを売ったり買ったりする、比喩的な意味における場所です。魚や青果の卸売市場、証券取引所、外国為替市場だけではありません。ショッピングモールやディスカウントショップの店頭、各種の自動販売機や券売機、公共料金の口座振替、テレビやカタログによる通信販売、ネット上のオンライン・ショップやオークション・サイト、企業への就職なども市場です。普段はそれに気づかないことも多いのですが、市場は、私たちの身の回りいたるところに存在します。

これらに共通していることは、そこでは貨幣を対価として商品が取り引きされているということです。貨幣で売買されるものなら何であれ「商品」です。音楽、コンピュータ・ソフトウェアなどの情報財やパートタイマーや海外の労働力もそうですし、地位や名声、臓器や精子・卵子さえも貨幣を支払うなら、「立派な」商品になってしまうのです。農家が自家消費用に生産する米や家庭で食べる食事は商品とはいえません。つまり、貨幣がモノを商品にし、商品を売買する場所を市場にするのです。もしこの世に貨幣というものがなかったならば、市場も商品も存在しなかったともいえるでしょう。貨幣は、市場や商品を成立させるための前提条件であって、市場での商品の取引を効率的にするための便利な道具ではないのです。

◆貨幣と言葉のアナロジー◆

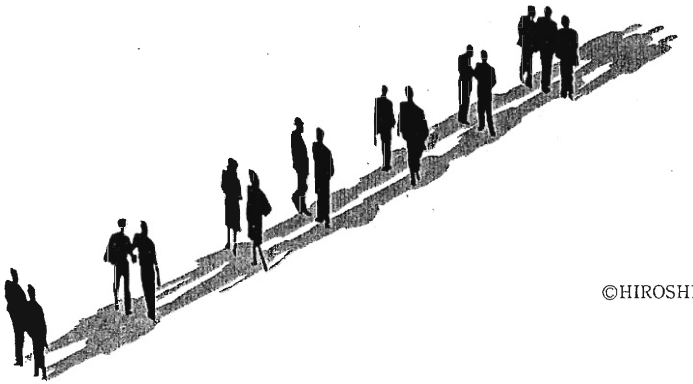
いま述べたことは、貨幣とよく比較される言葉について説明すれば理解してもらえるかもしれません。私たちが言葉を使うのは、ただ人とのコミュニケーションをスムーズにしたり、人にメッセージを伝達したりするためなのでしょうか。あるいは、言葉を介さない以心伝心の世界がまずあって、その世界の狭さや不便さを克服するために言葉が生み出されたといえるでしょうか。言葉がなければ自分が言いたいことを説明することも、相手が伝えたいことを理解することも十分にはできないのは確かです。

言葉のやりとりを通じて自分と相手の考え方や感じ方の違いが明らかになるということもよく経験することです。もし言葉がなかったならば、現代の高度な文明や多様な文化を持つことができなかったこともまた確かでしょう。しかし、コミュニケーションは、常に失敗する危険をはらんだ試みでもあります。言葉はいつもコミュニケーションを円滑にしてくれるわけではありません。ちょっとした誤解や行き違いなら言葉で説明すれば簡単に解消されるでしょうが、感情の複雑なもつれがある時には、それを解きほぐそうと話せば話すほど糸はかえって絡み合い、取り返しがつかないほど両者の溝が広がることもあります。また、お互いの考え方の違いも容易に認め合えるものではなく、思想、信仰や世界観の対立がエスカレートして、断絶や暴力に至ることも少なくありません。事実、今も世界のあちこちでテロや戦争が続いています。こう見てくると、言葉はコミュニケーションのための便利な道具というよりもむしろ、人が困難なコミュニケーションをなんとか成立させようと絶えず努力するための不可欠な前提条件なのです。「始めに言葉ありき」。良かれ悪しかれ、私たちは言葉から出発する以外にないのです。

◆貨幣は便利な道具か？◆

いま述べたことは、貨幣にもほぼ同じように当てはまります。しかし、私たちが貨幣を使うのは、それが便利だからだ、使用者にメリットがあるからだと考えられているのではないでしょうか。経済学における通説も、貨幣は、物々交換の不便さを解消する便利な道具であると説明しています。このことをまず見てみましょう。

いま、漁師が海で鮭をとり、狩人が山で鹿を仕留め、各々が自分で食べきれないほどの鮭や鹿を持っているとしましょう。ここで漁師が鹿を、狩人が鮭を欲しているならば、両者の間で物々交換が行われるはずです（もちろん、この



©HIROSHI YAGI

とき鮭と鹿をどのような比率で交換するかについて両者が合意しないと、交換は行われませんが)。しかし、漁師が欲しいのは鹿ではなく、兎であるならば、この物々交換は成立しません。

両思いでなければ恋愛が成就しないように、互いに相手の所有物を求めていなければ、つまり、欲望の二重の一致がなければ、物々交換は行えないのです。相思相愛の陰で、その何倍もの片思いが生まれては消えているのは致し方ないとしても、経済の世界では、欲しい人のところにモノが届かないというのは困ります。ここで、もしだれもが受け取ってくれる「何か」があるとすれば、この問題は解決します。この「何か」が貨幣です。それを予め持っていれば、他の人々も必ず受け取ってくれるのだから、もはや片思いに嘆く必要はありません。狩人もまずだれかに鹿を売って貨幣を手に入れれば、鹿を欲しがらない漁師からも貨幣で鮭を買うことができます。狩人は、鹿→貨幣→鮭と2回交換を行うことで、目的とする鮭を手に入れられるわけです。

では、この「何か」はどうやって生じるのでしょうか。オーストリア学派の経済学者メンガーによればこうなります。ある地域で、比較的多くの人が欲しがっているモノがあるとしましょう。ここでは、それを「金（きん）」とします。狩人は、別に金細工の装飾品を身につけようなどと思っていないかもしれませんが、それでも金を手に入れるメリットがあります。なぜなら、自分の欲求の対象である鮭を所有する漁師が金を欲する可能性は鹿よりもずっと高いので、金を持っていけば鮭との交換が成功する見込みも増大するからです。したがって、金を直接欲しない人も、交換を円滑にするために金を手に入れようとします。金そのものを消費したいという人が最初はそれほどいなくても、次第により多くの人が販売可能性の高い金を貨幣として受け入れることになるのです。かくして、金は流通手段へと自発的に進化したというわけです。

■西部　忠（にしべ　まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

◆貨幣その複雑なるもの◆

これは、メンガー以来、教科書や解説本などいろんな所で語られている、それなりによくできたストーリーです。しかし、これは、便利な流通道具という貨幣のメリットだけを描いたものにすぎず、貨幣にはらまれるさまざまなデメリット――バブルや恐慌、所得や富の格差、拝金主義、コミュニティや自然環境の崩壊など――を無視しています。そして、これが市場原理主義の理想を表現するもう一つの命題――「理想的な市場とはいろいろなモノやサービスを最も効率的に人々へ配分する装置である」――と結びつくと、市場経済はほとんどバラ色のように描かれてしまいます。しかし、貨幣と市場がそういうものであるというならば、次のようないささか空想的な意見にも反論することはできないでしょう。「現実の市場は理想の市場にはほど遠いが、コンピュータ技術がよりもっと発達すれば、いつかコンピュータやコンピュータ・ネットワークによりそれを実現することができる。そうなれば、市場経済はより完璧になり、あたかも物々交換のようにモノやサービスを配分することができるから、貨幣という余分なものは不要になるにちがいない」。貨幣という便利な道具が、コンピュータが作る理想的な市場という、より便利な道具に取って代わられるであろうというこの予測は正しくありません。それが前提とする貨幣と市場のとらえ方がそもそも一面的にすぎるからです。貨幣や市場は、もっと多様な側面を持つ複雑なものです。

貨幣を単なる流通手段として見るならば、それは単に名目的な媒介にすぎず、景気動向や失業などの経済の実体には影響を及ぼさないという考えが導かれます。しかし、現実から見て、それが正しい主張であるとは思えません。「始めに貨幣ありき」。私たちはまず、貨幣や市場が便利な道具であるという考え方から自由になる必要があります。その上で、貨幣がいかに市場を作り上げているのか、それと同時に、貨幣を変えることで市場を変えることはできるのかを考えるべきなのです。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❸回 ロビンソン・クルーソーとヤップ

貨幣は物々交換の不便さを解消する道具というより、言葉と同じく、経済社会を形成するために不可欠な媒体です。「始めに貨幣ありき」とはこのことを意味します。

今回は、二つの寓話を題材にしてお金の問題にさらに二つの方向から光を当てます。一つはロビンソン物語、もう一つはヤップ島の石貨についてです。

◆ロビンソン・クルーソーの世界◆

ロビンソン・クルーソーとは、18世紀に活躍したイギリスの小説家デフォーが書いた冒険小説の主人公です。ロビンソン物語は、「経済とは何か」を説明するために経済学でしばしば引き合いに出されてきました。

ロビンソンは、父親の忠告を聞かず一攫千金を夢見て航海に出ますが、その途中で嵐に遭い、彼の乗った船はある無人島に漂着します。彼は一人で何とか生きのび、難破した船からパン、米、チーズ、肉類、酒といった飲食物の他、衣類、大工用品、武器、弾薬、インク、紙、コンパス、シャベル、針、糸など最低限の生活をするのに必要な品々を運び出し、「絶望の島」で一人暮らしを始めます。ロビンソンは、工具で住居を建てて柵をめぐらし、さらにテーブルや椅子まで作ります。また、銃を持って狩りに出かけ、山羊や野鳥を捕って加工し貯蔵しました。やがて山羊を飼い、麦や米の耕作を行ったため、彼の生活水準は向上しました。丸太船を何カ月もかけて作るための蓄えもできたし、聖書を読む時間さえ持てるようになったのです。

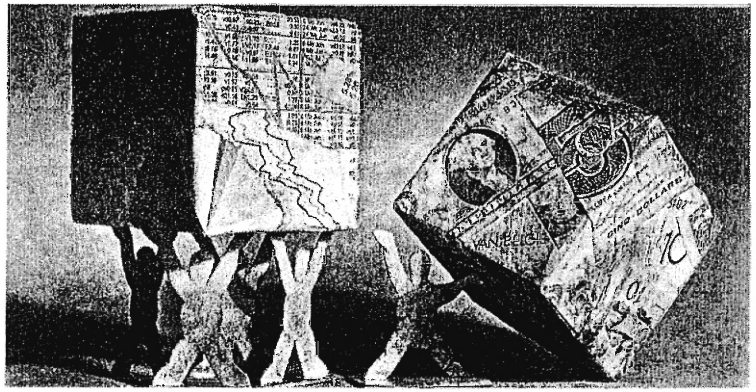
このように、ロビンソンは試行錯誤を繰り返しながら、生産や牧畜・農耕の大切さを知り、また自分の時間をどのように配分するのが合理的であるかということを学んでいきました。必要以上の食糧を備蓄しても、どうせ野獣の餌になったり腐敗したりしてしまいますから意味がありません。むしろ人間的であるために聖書を読み、お祈りをしました。

ロビンソンはある日、難破船の中でヨーロッパやブラジルの貨幣、金貨、銀貨を発見した時、こうつぶやきます。「無用の長物よ。お前はいったいなんの役にたつというのか。お前は今の私に鐚(ビタ)一文の値打ちでもあるというのか。お前はもう拾いあげるにも値しないのだ。いくらお前が山のようにたくさんあったところでこのナイフ一本にもとうていかなわないのだ」。なのに、どういうわけか彼はそれらを持ち帰ってしまいます。結局、それが無人島では錆び付くしかなく、文明世界では蓄積欲をもたらす元凶であることを思い知るために。しかし、半ば無意識のこの行為は、ロビンソンの文明社会への回帰願望とお金からの逃れがたさを暗示しています。

この小説は、今まで敬虔なピューリタン像を描いたものとして倫理的、宗教的に解釈されることが多く、日本では、夏目漱石が道徳的な労働小説、無理想な現実主義だと批評したり、森鷗外が自立した個人や創業者という人物像を見いだしたりしています。しかし、経済学者がロビンソン物語を愛好する理由は別にあります。

彼らが注目するのは、ロビンソンが限られた資源をできるだけ効率的に利用しようとする合理的「経済人」としての姿です。所与の目的にたいする希少資源の最適配分にこそ経済の「本質」があると考えると、どうしてもそこに目が行きます。それに無人島での主な資源とは彼自身の労働ですから、そこは労働価値説がそのまま当てはまる世界でもあります。しかし、それは交易相手なき自分一人の自給自足経済なのですから、貨幣は必要ありません。かくして、いろんな学派の経済学者がロビンソン物語に経済の本質を発見し、自分に都合のいい教説を引き出して満足した結果、貨幣や市場の本質がすっかり見失われてしまったのです。

ところが、ロビンソン物語は経済学者が考えたほど単純なものではありませんでした。ロビンソンは無人島を脱出して英国に舞い戻った時、自分が所有していたブラジルの農園を売却し、その代金としてスペイン金貨3万2800枚分の為替手形を受け取りました。彼は、自給自足ではなく、多数の人々が交易を営む市場経済で必要なものは、自給自足ではなく貨幣であることを決して忘れな



©Andy Martin

かったのです。

◆ヤップ島の石貨◆

もう一つのお話は、架空の無人島ではなく、今も多くの人々が暮らす、実在する島のちょっと変わったお金にかんするものです。

ミクロネシア連邦のカロリン諸島西端に位置するヤップ島では、大きな石貨が今もなお使用されています。ヤップ島には金属がなかったので、古来より石が資源とされ、いろいろなものに応用されてきました。ですから、石が貨幣として使われたとしても、けっして不思議なことではありません。

ヤップ島の石貨は「フェイ」と呼ばれ、大きな石でできた車輪のような形をしています。ヤップ島の住民は、400キロメートルも離れたパラオ島で石灰岩を切り出してフェイを作り、それをカヌーや筏の海面下にロープで縛り付けて運んできたのです。その大きさは30センチほどの小型のものから、4メートルぐらいの超大型のものまでいろいろです。中央には、ちょうど五円玉のような穴があいていて、大きいものは丸太を通して何人かで担いで持ち運ばなければなりません。昔アニメで恐竜とともに登場する原始人たちがそうやって石貨を運んでいたのを覚えている人もいるでしょう。フェイは主として婚礼などの儀式における贈答、家屋の建築への謝礼、紛争解決などに用いられます。

大きなフェイは道ばたや庭で野晒しになっています。狭い島の中では、盗んでいく者などいません。新しい持主は以前の所有者の敷地の上に置きっぱなしということもあるし、多くのフェイが広場に置かれている「石貨銀行」もあります。要は、それが自分のものであることを周りの人々に認めてもらえばいいのです。また、その価値は、大きさだけでなく、航海の伝説や来歴によって異なってきます。フェイのこのような不可思議な性格を表すエピソードがあります。

■西部　忠（にしべ まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

ヤップ島最大のフェイはある一家のものであり、そのことをヤップ島の住民の誰もが知っているのに、だれもそれを見た者はいません。まるで怪談のようですが、次のような伝説が昔から語り継がれています。

この一家の祖先が途方もない大きさのフェイを運ぶ途中、激しい嵐に巻き込まれ、自らの生命を守るためにやむなく筏のロープを切ってしまいました。ヤップ島に戻ったその祖先は、地団駄踏んで悔しがり、そのフェイがいかに大きく見事なものだったか、海中に沈めたことがいかに避けがたいものであったかを人々に強烈に訴えました。その甲斐あってか、人々はこの証言を受け入れました。たとえ海中に沈んでいようとも、所有者の家の敷地に転がしてあるのと同じではないかというのがその理由です。海底に沈むこの巨大フェイは、数世代前から伝わるこうした伝承の中にしか存在しませんが、その購買力は今日までずっと有効だといいます。

ここから次のことが言えるでしょう。まず、フェイは一般的交換手段というよりも、特定の目的のための経済的・社会的富の象徴です。それは加工し、運ぼうとした者の名誉と威信の象徴でもあるのです。たとえ運搬や所有の対象として不便であり、実用的な価値はまったくないものであっても、誰もが伝説とその価値を信じるかぎり、それはお金として通用するわけです。海中のフェイでもいいのならば、本当はそれが何であるかどうかも関係ありません。だれも見ることも触れることもできないモノでも人々が信じれば貨幣になるという意味で、それはある種の「観念」であるとすら言えるでしょう。

何がお金になるかは、何がある社会で慣習や伝統に基づいた社会的価値物になるかによります。もっと簡単に言えば、ある社会の人々が何をお金として信じているかによって決まってくるのです。そういえば、私たちもその素材が何の価値もないモノを日々お金として受け取っています。そう、「1万円」と書かれたあの日本銀行券です。発行に必要な費用がわずか20円にも満たない紙切れが1万円の価値があるモノとして日々流通しています。

お金は物理的なモノではなく、慣習や伝統、信念や観念に支えられた社会的なコト、しかも欠かせないコトです。最近、電子通貨や地域通貨に注目が集まっていますが、それは、コトとしてのお金の意味を再考すべき時が来ていることを告げているのではないでしょうか。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❹回　貨幣の謎

◆現代の貨幣へ◆

ロビンソン・クルーソーは、自分で食料、衣料、住居などを生産し消費する自給自足を営んでいました。彼一人の孤島にも「経済」はありましたが、「社会」はありませんでした。そして、多くの独立した個人が分業を行う社会がなければ、貨幣も市場もまた必要ないのです。

このロビンソン経済のイメージをもう少し広げれば、「家族」についても同じようなことが言えます。家族の中では、調理や洗濯といった家事労働が貨幣で取引されるということはありません(いつかそうなるかもしれませんが)。家族の中に経済があって市場がないということは、それが未だに共同体であるということの証です。家族とは、夫婦や父母子が有機的に結合して一体化している共同体であり、家族の構成員は自律した個人ではなく、身体に対する手や足や頭のような存在だということです。市場は共同体の外、例えば都市の広場や貿易港で成立しました。これに対して、「経済（エコノミー)」とは、「家」のような共同体を経営的に管理する「家政術（オイコノミア)」に由来するものです。

一方、ヤップ島のフェイのように、ある共同体の内部でだけ富や名誉の象徴として通用し、特定の財やサービスの取引に使われる貨幣もありました。これは貨幣のある一面を表しています。貨幣は単なるモノではなくコトとして成立し、人と人との社会的な関係を表す情報であるということです。

このように、ロビンソン経済やヤップ島の石貨は貨幣について考えるためのヒントを与えてくれますが、それらは現代の市場経済社会からかけ離れた世界の出来事ともいえますから、そこから直接、私たちが使っている貨幣を理解することはできません。そこで、現代の貨幣についてもう一度考えてみましょう。

◆「購買手段」としての貨幣◆

経済学では、貨幣の機能は1）流通手段、2）価値尺度、3）支払手段、4）蓄積手段などと説明されています。「価値尺度」とは貨幣が円やドルなど経済計算の単位を与えるということ、「支払手段」とはローンなどの信用でモノを買い、一定期間後に貨幣で支払い決済をするということ、「蓄積手段」とは貨幣で富を蓄えることができるということです。しかし、この中で最も重要な機能は普通「流通手段」だということになっています。

以前に、経済学では、貨幣は物々交換に伴う不便を取り除くために発生したと説明されることが多いと述べました。これは、貨幣はまず何よりもモノとモノの交換をスムーズにする道具、すなわち、交換手段だと考えられているからです。貨幣が交換の中継ぎ役にすぎないのならば、その素材はなんでもよいということは容易に理解できます。貨幣を手段としてモノが入手できるのであれば、貨幣は別に金銀でなくとも、紙でも、電気信号でもかまわないからです。

けれども、こうして考えると、次のような貨幣の不思議さは見えてきません。ずいぶん昔のことですが、コマーシャルに「100円でカルビー・ポテトチップスは買えますが、カルビー・ポテトチップスで100円は買えません」というのがありました。もっと一般的に言えば、貨幣さえもっていればデパートやコンビニへ行けばどんなモノでも買えるのに、銀行にどんなモノをもっていっても貨幣は買えないということです。「当たり前じゃないか」といわれるかもしれませんが、これは貨幣の本質をつくフレーズです。ためしに「今日は貨幣の代わりに米をもってきましたが、これでそこのバッグを買えますか」とデパートの売り子さんに尋ねてみてください。おそらく、丁重に断られるか、さもなくば、警備員につまみ出されてしまうでしょう。いくら「貨幣は何でもいい」といっても、それは「貨幣の素材は何でもいい」ということで、任意のモノが貨幣として受け取ってもらえるということではありません。

貨幣にはそれでモノを買うことができる力、つまり「購買力」があります。モノには他のモノを買う力も、貨幣を買う力もないわけです。この意味で、貨幣は万能の力を持った王様、モノは王様にへいこらと頭を下げる家臣にすぎないともいえるでしょう。そういえば、デパートに行けば、店員はあなたに深々

©John Still

と頭を下げてくれますが、あれは言うなれば、店員があなたにではなく、あなたが持っているはずの（本当にもっていないこともあるが）貨幣に頭を下げているようなものです。モノを代表する店員が貨幣を代表するあなたに頭を下げるところに、貨幣の購買力が表れているのです。このように、貨幣はモノとモノの交換をスムーズにする仲介者というよりも、モノを買うことができる（逆に言えば、買わないこともできる）強い決定権を持つ王様のような存在なのです。貨幣は交換手段というよりも、むしろこうした決定権を独占した購買力の固まり、すなわち、「購買手段」です。

◆観念の自己実現◆

貨幣はモノとモノの交換のための手段であるというと、貨幣はちっとも偉くないことになりますが、実際には貨幣が偉くてモノは偉くないのです。そうでなければ、なぜだれもが貨幣を求めるのかが説明できません。しかし、これで話がおしまいというわけではありません。では、そもそも貨幣はなぜそんなにもてるのでしょうか、なぜそんなに偉いのでしょうか。

こういう風に考えていくと、いつのまにかわたしたちは振り出しに戻ってしまったことに気づきます。貨幣とは、光り輝くとか、かっこいいとか、貴重だとか、モノとしての素材が持っている性質や属性によってもてるわけでも、偉くなるのでもありません。貨幣のモノとしての性質は何でもよいのです。貨幣がモノを買うことができる購買力を持っているのは、みんなが貨幣を求めるからです。しかし、みんなが貨幣を求めるのはなぜかといえば、貨幣が購買力を持っているからです。これは、一種の「堂々めぐり」のように見えます。わたしたちは、どうやら貨幣の迷路にさまよい込んでしまったようですが、一体、ここに出口はあるのでしょうか。

日本銀行券は不換紙幣ですから、なんら有価物に兌換されません。また、日本銀行券は財務省印刷局で印刷されますが、一万円札の製造費用は20円足らず

■西部　忠（にしべ まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

です。その実質価値はほとんどないに等しいといえるでしょう。このようにモノとしてはわずかの価値しか体現していない不換紙幣がなぜ一万円として流通するのでしょうか。

先ほど、「みんなが貨幣を求めるのはなぜかといえば、貨幣が購買力を持っているからです」と言いましたが、これは部分的に省略した表現です。これをもう少し正確に言い直すとこうなります。「みんなが貨幣を求めるのはなぜかといえば、『貨幣が購買力を持っている』と、みんなが信じているか予想しているからだ」と。縮めれば、「貨幣が偉いのは、みんなが貨幣は偉いと思っているからだ」ということです。これを自然現象に置き換えて、例えば「地震が起こるのは、みんなが地震は起こると思っているからだ」と言ってみると、なんだか非科学的なオカルト話のようにも聞こえます。

しかし、社会現象では、みんなが思うことがいわば観念自身の力によって現実になるのはそれほど珍しいことではありません。例えば、みんなが景気はよくなるだろうと思うと、企業は消費が拡大するだろうと予想して投資を活発に行いますし、消費者はモノが値上がりすると予想して消費を拡大します。これによって実際に景気がよくなってしまうのです。もっとわかりやすい例は株式市場で見られます。ある会社の来期以降の収益が好転すると予想されれば、みんながその会社の株を買いますからその株は値上がりします。しかし、たいした理由がない場合にすら、同じことは起こりえます。ただ単に多くの人がある会社の株が値上がりすると思えば、それらの人々がその会社の株を買いますから、実際に値上がりします。そうすると、これを見てさらに多くの人々がその株を買うことになります。こうして、この会社の株はあっというまに暴騰するということがあります。

人々が同じようなことを考え、一斉に同じ方向へと動いてしまうということがブームやバブルを発生させ、経済を不安定にする一つの原因なのですが、これについてはいずれお話ししましょう。とにかく、「観念の自己実現」は私たちの身の回りのあちこちで起こっています。これなしでは社会は成り立たないとすら言えるかもしれません。そして、購買手段としての貨幣もまた、この「観念の自己実現」によって支えられているのです。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❺回「裸の王様」

◆「裸の王様」◆

前回の疑問は、「モノとしてはわずかの価値しか体現していない不換紙幣がなぜ一万円として流通するのか」というものでした。実は、不換紙幣が流通する謎を解く鍵は、アンデルセン童話「裸の王様」にあるのです。（ちなみに、この話の原題は「皇帝の新しい着物」ですから、本当は、「王様」ではなく「皇帝」です。しかし、ここでは「王様」で通します。）これはだれもが一度は読んだはずですが、子供向けの童話は脚色がされているので、ここではオリジナル版であらすじを紹介します。

見栄っ張りな王様は、世界一美しいだけでなく、愚か者や身分に相応しくない者には見えないという不思議な衣装があると聞いて早速それを作らせます。衣装の出来具合が気になるので、王様は最も正直で身分に相応しいと思える大臣に様子を見に行かせます。帰ってきた大臣は、「まったく立派なものでした」と報告します。今度は王様が見学に行きます。実は、王様自身にもその衣装は見えなかったですが、「何も見えない」と口にすれば自分の愚かさや自分が身分不相応であることを認めることになってしまいます。そこで、王様は「見事だ、気に入ったぞ」と大きな声で言いました。衣装が完成すると、王様がこの衣装を身にまとって街を行進することになりました。だれも王様が裸であるなどとはいえません。しかし、一人の子供だけが笑いながらこういうのです。「あ、あの王様、裸だ」と。これが人々の間にひそひそ伝わっていき、最後には、とうとうだれもが「王様は裸だ」と叫びました。しかし、王様は、いまさら行進をやめることはできないので、いっそう堂々と胸を張って行進を続けました。

最後のクライマックスが強烈なので、この話は、世知辛い大人よりも正直で無垢な子供の方が世の中の真実を見ることができるといった類の教訓とともに記憶されがちなのですが、むしろそれ以前の部分にこの話のおもしろさがあります。

まず、臣下や民衆にとっては、王様はどんな格好をしていようがやはり偉いのですから、だれも王様を笑ったりすることはできません。不敬罪で捕まって牢屋に入れられてしまうかもしれないからです。また、王様が本当は裸であるとしても、あたかも王様が素晴らしい衣装を着ているかのように振る舞いつつ、王様を賞賛しておいたほうが、人に後ろ指を指されないから得だと思うでしょう。それに、王様の衣装が見えないと言えば、自分が愚か者で身分不相応であることを公言することになりますが、そんな恥ずかしいことはできないのです。これは、臣下や民衆のみならず、王様自身にも当てはまります。

本当は何も「ない」のに、だれもがあると信じる（ふりをする）ことによって、あたかも実際に「ある」かのような「現実」ができあがります。こうして奇妙なことに、「観念の自己実現」が成就するのです。先ほど見たように、人々が「王様は裸だ」と言えない理由はひとつではなく、「いくつも」あるのです。いくつもあるということは、「裸の王様」は「観念の自己実現」としてかなり強固なものであることを意味します。後で見るように、これは不換紙幣についても当てはまります。裸の王様の「見えない衣装」が立派な衣装として通用してしまうことと、それ自身に何の価値もない不換紙幣が立派な貨幣として通用してしまうことの間には、基本的に何ら異なるところがありません。

◆慣習と予想の自己実現としての不換紙幣◆

「日本銀行法」には、「日本銀行券は法貨として無制限に通用する」と書かれています。日本銀行券は国の法律が通用力を保証したれっきとした「法貨」なのです。それは国家権力の後ろ盾を持つ王様のように偉い存在です。日本国内で一万円を差し出され，それを貨幣ではないただの紙切れだから受け取らないというならば、法律違反で罰せられるかもしれません。しかし、法的強制力があるから人は紙幣を受け取るのだというならば、それは言い過ぎでしょう。法律や処罰によって、人に何かをさせることができると考えるのは誤りです。一般的にいって、法律は何かをさせないようにすることはできますが、させるようにすることはできないでしょう。だから、やはり個人の側にそうするメリットがなければなりません。

大臣や民衆が「王様は裸だ」と思ってはいても口に出さなかったのは、単に王様の権力を恐れたからではなく、そうすることが自分にとっても得だったからです。これと同じく、日本銀行券が現実に流通しているならば、たとえそれ自身に何の価値もなく、また、それを日本銀行の窓口に持っていっても金貨などのそれ自体価値あるモノ（本位貨幣）に兌換してもらえないにしても、日本銀行券を受け取ることの利益があるはずです。それはなんでしょうか。

©Jed Share/amana images

まず、日本銀行券は昨日までずっと通用していたのだから、今日も通用するはずだ、だから受け取るのだとすれば、自分の思考を節約することができます。この日本銀行券を受け取るべきか否かよりも、どうやってお金を稼ぐか、稼いだお金をどう使うかなど、私たちには考えなくてはならないことは山ほどあるのです。もしいろんなことについてあれこれ思い悩んだり、すべてを疑って考え込んだりしていたら、きっと何も行動できずに人生は終わってしまうでしょう。実際、いままでと同じことが今回も起きるだろうと想定して行動することはよくあります。例えば、人と約束するとき、あの人はいままで約束通りに来たから今回も来るだろうと考えますし、自動車で出かけるとき、自動車は昨日までは故障しなかったから、今日も快調に動くだろうと考えます。こうしたことは数え上げればキリがありません。このような判断は惰性的なものであり、それに基づく行動は習慣的なものですが、そうすることで、ほとんど何も考えずに定型的に行動することができます。そして多くの人が習慣的に行動していると、社会にある種の安定的な秩序、つまり慣習が生まれ、それが社会的な活動の枠組みになります。だから、私たちは結果的にそうした枠組みを当てにして行動することができます。そうなると、現実に人々の思考は節約され、社会は安定化します。こうして「観念の自己実現」は「慣習の自己実現」として達成されるのです。

しかし、物事をもっと合理的に考えようとする人ならば、上のような考え方には何ら合理的な根拠がないと思うに違いありません。しかし、その人も次のように考えるでしょう。「自分は、日本銀行券に何に価値も認めていないし、昨日までそれが通用していたからといって今日も通用するとは考えない。が、受け取った一万円札がたとえ紙切れでも、未来において次の人がそれを一万円札として受け取ってくれると予想できるならば、自分がそれを受け取るのは理にかなっている。ババも次の人に渡せるならば、何の損にもならないからだ。もし、次の人も自分と同じように合理的に考えるならば、やはり日本銀行券を受け取ってもよいと考えるだろう。そしてまた、次の次の人も、次の次の次の人も同じように考えるはずだ。これが無限に続くならば、みんなが受け取ってもよいと考えるだろう。だから、自分も受け取ってもよい」云々。こうして、この合理的な思考の持ち主も、慣習的な行動の人と同じく、日本銀行券を受け取ることになるでしょう。ここでは、「観念の自己実現」は「予想の自己実現」として達成されます。

■西部　忠(にしべ まこと)
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

◆観念から形成される現実の強さ◆

「慣習の自己実現」と「予想の自己実現」のいずれにしても、日本銀行券は受け取られるということになります。こうした観念から形成される「現実」はかなり強固なものであることがおわかりいただけるでしょう。

だから、「王様は裸だ」と叫んだあの子供のように、「日本銀行券なんてただの紙切れだ、何の価値もない」と、あなたがいくら一人で叫んでみたところで、それが急に価値を失うわけでも、流通しなくなるわけでもありません。叫ぶ人数が多少増えても、圧倒的多数は元のままであれば、変化は起きないでしょう。一人の純真な子供が叫んだから王様が裸になるのではありません。みんな心の中では奇妙だと思いながらはっきりと王様が裸だといえない疑心暗鬼の状況で、子供のあの言葉が引き金となり、「なんだ、他の人にもやはり見えないんだ」という気持ちが急速に広がっていくところにクライマックスが来るわけです。そこで王様は本当に裸になってしまうのです。あの物語には、「王様は裸だ」という子供の声がいかにしてある限界を超えて広く伝染したのかは描かれていません。いずれにしても、他の多くの人が「そうだ、日本銀行券なんて何の価値もない」と叫ぶとき、あの強固な「観念の自己実現」の構造がうち破られるのです。日本銀行券はその価値を大きく喪失し、もしかしたら受け取られなくなるかもしれません。貨幣価値が大幅に減少するのは、物価が急騰する「ハイパー・インフレーション」という事態です。しかし、円についてハイパー・インフレーションが起きたとしても、それは貨幣の崩壊を意味するわけではありません。人々は円以外の新たなる貨幣――ドルなどの世界通貨か金や米などの代替的本位貨幣――を追い求めることになるでしょう。つまり、「観念の自己実現」は別の形で生き延びるのです。

そういえば、「裸の王様」では、子供に裸であると指摘され、みながそれに呼応した後も、王様は威風堂々と歩き続けたではないですか。もう一つの「観念の自己実現」である王権そのものはきっと生き延びたのではないかと思えるのです。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❻回　貨幣の現在と未来

貨幣は、法や国家の存在を前提しつつも、その強制力によって通用するのではなく、観念の自己実現のメカニズムによって支えられています。であるならば、貨幣は、社会的な慣習や合理的な予想とは異なる観念の自己実現によっても成り立つにちがいありません。例えば、最近注目されるようになった「地域通貨」は「信頼」の自己実現によって成り立つ貨幣といえるでしょう。しかし、その話をする前にまず貨幣の歴史と現状を振り返っておきましょう。そうすれば、地域通貨を未来の貨幣の一つの可能性として理解することができるはずです。

◆貨幣の二つの流れ:情報化と信用貨幣化◆

現代にいたる貨幣の発展史には大きく二つの方向性があることがわかります。

一つは「情報化」という流れです。貨幣は、穀物や家畜から、貴金属(金・銀)、鋳貨、紙幣、手形、小切手、プラスティックカード、電子マネーへと変化してきました。情報技術を駆使した電子マネーでは、価値情報は電子信号として通信・記録されますが、私たちはハードウェアやソフトウェアを介さなくては価値を表す数字すら目で見ることができません。このように、貨幣はその素材の性質や希少性に依存しない情報やデータ、あるいはそれらを処理するプログラムへと近づいており、いわば「モノ」の部分を徐々に捨て、「コト」として純粋化しつつあるのです。貨幣は、それを使う主体の側における観念の自己実現によって成立するばかりか、その客体自身が情報化・プログラム化しています。

もう一つの流れは貨幣の「信用貨幣化」です。貨幣の中核部分は、鋳貨（＝本位貨幣）から手形、兌換（だかん）銀行券、預金通貨（＝一覧払債務証書)、不換銀行券（＝請求権なき債務証書）へと変貌を遂げました。つまり、金や金貨のようにその素材そのものが価値をもつ「本位貨幣」から、負債の存在を証明し、その返済を約束した「信用貨幣」へと変化したのです。しかも、債務証書である貨幣が兌換制から不換制へ移行したことで、負債が返済義務のない有名無実なものになりました。この傾向は、先ほど述べた「情報化」に関連するものの、別の事柄です。なぜなら、それは貨幣の素材ではなく、貨幣・金融システムにおける変化を意味するからです。

日本の現行法定通貨は二つに大別できます。これら二つは同じ「円」という度量単位を持っているにしても出自と性質を異にします。

一つは、私たちが財布の中に持っているお札や硬貨などの「現金通貨」です。お札は日本銀行が発行する日本銀行券、硬貨は日本国政府が発行する補助貨幣です。現金通貨は財務省の印刷局や造幣局で紙や金属を原料として製造され、いずれも日本銀行を窓口として一般の経済社会へ出ていきます。日本銀行券は日本銀行の負債証書の一種であると見ることができます。しかし、これは不換紙幣ですから、日本銀行がその提示を受けて本位貨幣で返済する（兌換する）必要はありません。にもかかわらず、日本銀行券は民間主体間の債務を決済し、民間主体が政府への租税を支払うための現金通貨として通用するのです。

もう一つは、私たちが銀行の口座に持っている残高、つまり「預金通貨」です。預金通貨は現金通貨のような紙や金属という形を取らず、通帳の上に印刷されたり、コンピュータ上に記録されたりする単なる数字にすぎません。預金通貨は、預金者が民間銀行に預けている預金のうち、要求すれば直ちに払い戻される普通預金や当座預金などです。現金通貨をこれらの口座に預金すれば預金通貨になり、預金通貨を引き出せば現金通貨になります。その一方で、民間銀行は、こうした要求払預金の一部を支払のために準備しながら、企業や個人への貸付を行うことによって、「ハイパワード・マネー」（＝現金と準備預金の合計）の何倍もの預金通貨を創り出すこともできます。これが「信用創造」です。

このように、信用貨幣は、中央銀行券などの現金通貨と、民間銀行の債務証書である預金通貨とへすでに二重化しています。後者は、景気や資金需要の変化に応じて大きく膨張したり収縮したりする部分で、市場経済の不安定性を増幅します。1980年代後半のバブル経済も、民間銀行による信用創造が土地や株への投機資金を大量に提供したことによって形成されたのです。

◆二つの流れの意味するもの◆

マルクスはかつて「人間の解剖は猿の解剖の鍵である」と述べました。人間を理解することがその進化上の祖先たる猿を理解するための鍵になるという意味です。これを貨幣の進化に当てはめるならば、「現代貨幣の解剖は貨幣一般の解剖の鍵である」と言えるでしょう。それゆえ、現代貨幣に見られる二つの流れ――「情報化」と「信用貨幣化」――こそ、私たちに貨幣の本質を教えてくれるはずなのです。

©GAVIN R. WILSON/amana images

まず、貨幣の情報化は、貨幣が物理的なモノではなく、観念の自己実現により成立する社会的なコトであることを物語っています。貨幣は、その素材が価値を持つモノでなくとも、それ自身が価値を表示するコトであれば、つまり、一定の度量単位を持つ「価値尺度」であればよいのです。そして、貨幣の信用貨幣化は、貨幣がモノとモノの交換のための「流通手段」ではなく、価値の移転ないし債務を記録する「債務証書」、ないしは、債務の決済を行うための「支払手段（決済手段）」であることを示しています。そうであるからこそ、貨幣は、それでモノが買うことができる「購買手段」になり、それで価値を貯めることができる「蓄積手段」になるのです。したがって、価値の基準を備えた債務証書ないし決済手段である電子マネーは貨幣の本質を体現するものなのです。

負債の発生とは、何らかの度量単位で測った価値が債務者から債権者へ移転したことであると解釈できます。そして、債務証書とは、その価値の移転を証明するための記録にほかなりません。普通、このような価値移転が起きるのは、モノやサービスが債権者から債務者へ受け渡されたからだと考えられます。しかし、もしかしたら、そうしたモノやサービスの受け渡しはなかったかもしれません。債務者が債権者に与えた損害を賠償したり、寄付や贈与を行ったりするために貨幣が支払われた場合などがそうです。ですから、貨幣が移動する反対方向にモノやサービスが移動する時に、そこに商品売買が生じ、市場が生まれると考えるべきなのです。

◆「貨幣が市場を作る」◆

市場というとまず思い浮かべるのは、生鮮食料品の市場、美術品のオークションなど、多数の参加者が特定の時間と場所に集まり、「せり」によって商品価格を決めて売買を行う大規模な取引所でしょう。しかし、こうした「集中型」の市場は必ずしも一般的ではありません。むしろ、コンビニやデパートなどの店頭におけるように、買い手と売り手が一対一で売買を行う場合の方が圧倒的に多いのです。さまざまな時間と場所で行われるこうした相対取引を総体として眺めれば、それは取引所のような中心のない「分散型」の市場を構成していることがわかります。もし貨幣がなければ、売りや買いを一回ずつ行うことはできませんから、分散型の市場は成立しません。貨幣はこのような分散型の市

■西部　忠（にしべ まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

場を作り出すメディアとして機能しています。「貨幣が市場を作る」とすると、「貨幣が変われば市場も変わる」とも言えるのではないでしょうか。

慣習や予想の自己実現として成立する従来の貨幣は、人々が自分の経済的利益のみを考えるということを前提していました。しかし、実際には、人々はそれだけではなく、周りの人々との経済的・文化的な関係として形成されるコミュニティ、さらに何らかの価値観、理念、文化にも関心を持っています。そこに「信頼」の自己実現として、ある種の「貨幣」が成立する可能性があるのです。

◆信頼の貨幣としての地域通貨◆

現在、世界で数千、日本で百以上の地域通貨が自主的に作られ運営されています。地域通貨は、一定の地域やコミュニティの内部で流通する、法定通貨へ兌換できない、また、利子が付かない通貨です。参加者がそれを媒体としてモノやサービスを自発的に交換することで、地域の経済やコミュニティを活性化することを目的としています。より具体的には、自律循環型の地域経済を確立し、資本流出による実体経済の荒廃、失業や倒産といった問題を解決すること、介護、家事・育児、ボランティアなど通常の貨幣で売買されないサービスを活発にやり取りすること、さらに、自由、公正、協同、エコロジー、フェミニズムに関わる多様な理念や価値観を表現、伝達、共有することをめざしています。

地域通貨は、参加者全体が形成するコミュニティへの「信頼」を基盤として成立する「貨幣」だといえるでしょう。ここでいう「信頼」は「安心」とは違います。「安心」は、よく知っている相手ならば期待通りに反応してくれるので、自分に危害を加えられる心配はないといった閉鎖的な精神状況を表します。これに対して、「信頼」とは、全く知らない人と会ったときにでも、まずは相手を信じることから始めるといった、より開放的な倫理態度です。地域通貨のコミュニティの参加者は顔見知りだけではありませんから、参加者はまずお互いに信頼するところから始めます。他の参加者も地域通貨の経済的・文化的な意義を理解して積極的な参加していると信じることにより、地域通貨は受領され流通するのです。より多くの人々が地域通貨に参加すれば、地域通貨はその流通圏を拡大し、いつか新しいタイプの市場を形成するかもしれません（地域通貨についてより詳しくは、拙著『地域通貨を知ろう』〔岩波ブックレット、近刊〕をご覧いただければ幸いです）。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❼回　バブル伊曾保物語

これまで貨幣や市場について、いろんな角度から見てきました。しかし、実はこれは基礎編で、次の応用編へ行くための準備作業だったのです。貨幣と市場、今やこの二人の主役が揃ったので、いよいよバブルの話へと移ることにします。

◆「バブル」という言葉◆

「バブル」という言葉は1990年代の流行語大賞といっても過言ではないでしょう。この間、「バブルがはじけた」や「バブル経済崩壊後の不況」といったフレーズを一体何度耳にしたことでしょう。いまやすっかり市民権を得たこの言葉も、バブル真っ直中の80年代には、経済理論や経済史の一部の専門的文献を除けば、ほとんど使われていませんでした。株式用語にも、「ガラ（大暴落）」はありましたが、「バブル」はなかったはずです。

日経四紙（日本経済新聞、日経金融新聞、日経産業新聞、日経流通新聞）に掲載された記事件数を調べたあるレポートによれば、「バブル経済」というキーワードを含む記事件数は92年にピークに達し、その後は減少しています。これに対して、「バブル崩壊」の方は、92年以降97年のピークをはさんで98年頃まで一貫して高い頻度で使われてきました。つまり、90年代を通じて「バブル」という言葉はずっとはやっていたのですが、前半から後半へとその使われ方が明らかに変化しているのです。

「バブル経済」には、80年代後半は羽振りがよかったなあと懐かしむ気分が入っているとすれば、「バブル崩壊」には、90年代の長期不況の元凶はバブルにあったというような、当時を非難する意味が込められているわけです。「バブル」という言葉の流通（流行）そのものが、いわばバブルの仕組みを表しているのではと考えさせられます。実際、バブルの発生から崩壊へと、人々の気分は気づかないうちにガラリと変わってしまうのです。

バブルは、投機、いや、博打というリスクの高い営みに関わる特殊な輩の貪欲さが引き起こした「身から出た錆」として片づけることはできません。むしろ、ごく普通の人間が日常的に経験している「観念の自己実現」から生じる、そして、しばしば起こりうる集団現象として理解すべきです。すでに述べたように、市場を作る貨幣自体が「観念の自己実現」で成り立っているとすれば、市場が生み出すバブルも同じ仕組みから説明できるはずですから。

北米ネイティブ・アメリカンのクアキトル、トリンギット、ハイダ族などでかつて行われた儀礼的な贈与交換は「ポトラッチ」と呼ばれていました。そこでは、貴重な財をできるだけ気前良く仲間に与えあい、自分の宝物を破壊してしまうことすらあります。こうして、人々は熱狂し、ほとんど狂乱状態に陥ります。バブルはかなり発達した市場経済の中でしか発生しません。しかし、参加者の間での財や富の贈与交換として発生し、その崩壊がいつも価値の破壊を伴うクライマックスを迎えるという点で、それはポトラッチ交換に似ています。ポトラッチはある種の集団催眠ともいえるのですが、その根底には、人と人とのコミュニケーションにおける同調作用があるようです。おそらくバブルにも同じような人間心理のメカニズムが働いているはずです。

◆バブルとは？◆

ところで、英語のバブル（bubble）とは、日本語の「泡」のこと。洗剤を付けたストローで少しずつ息を吹き込み膨らませてやると、ふわふわと飛んでいく、だれもが子供の頃に遊んだあのシャボン玉を想像すればいいでしょう。それは非常に薄い洗剤の膜に被われた空気の玉ですから、永遠に存在しうるような代物ではありません。遅かれ早かれ「屋根まで飛んでこわれて消える」運命にあるわけです。

バブルは、株や土地など資産の価格がなんら経済的裏付けがないまま異常に上昇し続ける事態を指しています。しかし、ただ単に、資産価格が全般的に上昇するだけではバブルとはいえません。バブルの特徴は、経済の実体的な価値から離れて、資産価格がどんどん上昇していく点にあります。かといって、どの程度の値上がりが「異常」であり、「実体的な価値」とはどのくらいなのかもまただれにもわからないというのも、バブルのもう一つの特徴です。

バブルをもう少し厳密に定義しようとするならば、実物的な観点から資産価格の理論値を計算し、それと現実の価格との乖離をバブルとする必要があります。株には配当、不動産には地代や賃貸料、債券には利子といった収入（インカムゲイン）が付きますが、将来にわたって予想される各期の収益（＝収入－費用）を長期利子率等で割り引いて現時点での価値に換算したものは「現在価値」と呼ばれます。一般に、資産価格の実体的な理論値とは、このことを意味します。しかしそうはいっても、これは仮想的な価格であり、現実の価格ではないのですから、人々が実感できるわけではありません。どんどん値上がりし

©TAKAO ONOZATO/amana images

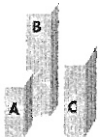
ているときにいくらこれが理論値だといっても、ほとんどだれも耳を貸さないのが普通でしょう。

バブルが膨らむプロセスでは、ちょうど80年代の頃のように、市場参加者みんなが豊かになったような錯覚を覚えるものです。だが実際には、バブルはみんなで豊かになろうという協調的な考えに基づいて生じるわけではありません。むしろ、そこには、自分だけが他の人々を出し抜いて手っとり早く儲けたい、あるいは、どんどん値上がりするからその好機を逃したくないし、自分だけトレンドに乗り遅れて損をしたくないという、人間の利己的欲望と同調願望がない交ぜになった混合物があるばかりです。しかも、私たちがつい最近目撃したように、それが破裂するプロセスでは、最終的に市場でうまく売り抜けた者だけが儲けることができるというのが過酷な現実です。失敗した個人や企業は自己破産したり、倒産したりします。バブルが膨らみはじける時には、だれかが儲かれば、その裏で必ず他のだれかが損をしており、その損得の合計はゼロかマイナスになっているのです。ゼロサムかマイナスサムこそ、バブルに特有な現象なのです。

◆バブルの進化論的な説明◆

バブルは何もごく最近の新現象というわけではありません。世界史を繙いてみれば、古今東西、市場と商業がある程度発達している経済のいたるところで、バブルが発生し破裂していることがわかります。最近では、エドワード・チャンセラーの『バブルの歴史』という本が過去の事例について詳しく書いています。それらは、教訓や風刺を含んだ多くの寓話を提供してくれていますが、何度も同じ過ちを繰り返しているところを見ると、人間はどうも歴史から学ぶということが苦手な動物のようです。

19世紀初頭に、ラマルクは、キリンとはかつて普通の長さの首をもつウマの一種に過ぎなかったという進化論を発表しました。進化論というとダーウィンの適者生存と自然淘汰の理論が有名ですが、ラマルクはダーウィンより前のフランスの博物学者です。彼によると、キリンの首が長いのは、次のような何世代にもわたる長い進化の過程の結果によるものだといいます。その昔、キリン



■西部　忠(にしべ　まこと)
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」他。

の先祖であったウマは木の高い部分にある葉を食べていましたが、そのうちちょうどよい高さの葉を食べ尽くしてしまいました。そこで、さらに高いところにある葉を食べるために思いきり首を伸ばしていたため、次第に首が伸びました。子供が葉を食べるためにはさらに少し首を伸ばさなければならず、こうして何世代にもわたって首を伸ばすという習性が重ねられていくうちに、キリンの首があれ程までに伸びてしまったというわけです。一つの世代が、後天的に学習して身に付けた性質は「獲得形質」といいますが、獲得形質が親から子供へと先天的な性質として遺伝することにより生物は進化すると説明しました。この場合、キリンの少し長くなった首が獲得形質です。ドーキンスに代表されるネオ・ダーウィニストは、獲得形質は遺伝子情報に変異を及ぼさないとしてこうした考えを否定しますが、先日亡くなったグールドのようにラマルク流進化論を継承する学者もいます。

人間は投機で痛い目にあっても、自分だけが儲けたいという欲望を抑制するような獲得形質を親から受け継いでいないのか、世代が変わると、懲りもせず同じバブルの物語を繰り返しています。戦争の悲惨な体験や記憶がない世代が再び戦争を起こすとよくいわれますが、これはバブルについても当てはまります。もし人間に利己的な欲望が先天的にインプットされていて、それが決して変わらないとするならば、道は二つしか残されていません。一つは、ルールや法律などの社会的な手段でそれを抑止すること、もう一つは、首をほんの少し長くするために歴史の教訓から学ぶ努力を続けることです。

ちなみに、私自身は、ドーキンスの利己的遺伝子という物語をそれほど信じていません。人間は遺伝子だけでその行動が決定されているとは思えないからです。純粋な意味では、利己的な人も利他的な人もいません。人間は様々な矛盾する要素を抱え込んだ複雑な存在ですが、それは、その人の生まれ育った環境や制度、生まれてから得てきた知識や経験によるのです。人は周りの人々、本、自分の経験など様々なことから学びうるし、知識や知恵は世代を越えて伝達して行くはずです。たとえそこから本当に何かを学びとることはとても難しいことだとしても。

イソップ物語は、紀元前のギリシア時代から2600年の時を経て伝承されてきたといわれています。そこには、ウィットとユーモアと教訓のみならず、大人向きの寓話に必要な辛口のスパイスが加味されています。そうありたいとの思いで、「経済伊曾保物語」というタイトルも付けられたのです。

経済伊曾保物語

西部　忠

第❽回　バブル伊曾保物語Ⅱ―チューリップ狂

これから数回にわたり、バブルの事例をいくつか紹介しつつ、どのようにそれが発生し破裂するのかを見ていきたいと思います。

人類はこれまで幾度もバブルを経験してきました。私たちも、日本の平成バブルやアメリカのITバブルを経験しています。

大衆の投機によって、ある商品の価格が急騰・暴落する例は、歴史上、非常に古くから見られます。フランスでは、９つもの教会がキリストの包皮といわれる得体の知れない代物を手にいれるために競って大金を注ぎ込んだとも、また、ユニコーンと呼ばれ伝説の聖なる動物といわれたイルカ科のイッカクの角は、それで作った杯が毒を中和すると信じられていたため、毒殺を恐れる各国の王室がそれに巨額を投じたとも言われています。

◆なぜチューリップが？◆

まず、今日まで完全に記録が残されている最古の事例を見ましょう。これは、今から350年ほど前、風車小屋で有名なオランダで実際にあった物語。それは、光り輝く黄金でも不動産でも株式でもない、どこにでも転がってしまいそうな植物の球根の話です。それはチューリップの球根です。お金のためならば、球根というものにも熱狂してしまうのがわれわれ人間なのです。

チューリップは、地中海の東部以東に原生するユリ科の植物で、その亜種は約160にも上ります。その語源はトルコ語でターバンを意味する「デュルバン」から来ているようです。それが、西欧に初めて輸入されたのは16世紀のこと。16世紀半ばにトルコを訪れた旅行者が、チューリップの美しさに惹かれ、ウィーンへ持ち帰ったところ、たちまち評判になり、２、３年のうちにドイツ、ベルギー、オランダへ伝わりました。トルコからオランダに初めて輸入されたのは1554年です。1593年にフランスのクルシウスがライデン大学でチューリップの美しい花の栽培に成功して以来、その異国情調あふれる美しい花は高い評価を受け、チューリップ栽培が王室や貴族の間で名誉なこととされるようになったのです。

チューリップ栽培は、ごくまれに突然変異によって新種を生み出すことがあります。栽培家は、珍種という幸運がいつやってくるかを期待して栽園を歩き回っていました。というのも、珍種の花が今までにない美しいものであれば、その球根を増やし、高値で売りさばくことができるからなのです。特に美しいチューリップの花がことさらに珍重されたため、希少な品種の球根が、投機の対象となっていきました。

◆チューリップ取引◆

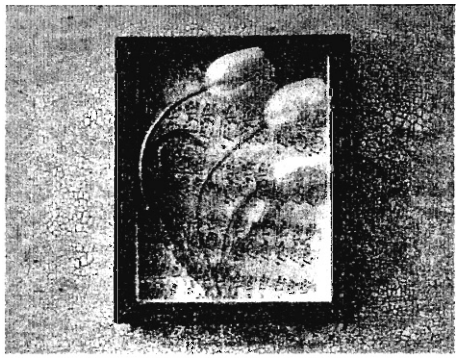
チューリップは17世紀の初頭にまずフランスで、ついでオランダで大流行しました。アムステルダムではすでに株式市場が開設されていましたが、そこにこの球根も上場されたのです。ロッテルダムやライデン、その他の都市にもチューリップの球根のための常設市場ができました。チューリップの取引は球根の売買という形態で主として冬に行われていました。一般的には、取引を行いたい者が球根に花の標本を付けて、業者仲間の出入りする宿屋や酒場に持ち込みます。例えば、そこで、以前に500ギルダーで買った「トロンプ将軍」という品種の球根に差額として現金200ギルダーを加え、「ボル将軍」という品種の球根と交換したりするわけです。

取引所のない小さな町では、大きな居酒屋に何百人もの人々が集まって取引しました。食卓やサイドボードの上など、あちこちに飾られた色とりどりの満開のチューリップが雰囲気を盛り上げたため、それはさながら大晩餐会のようでした。

また、何か月も先の翌春に現物を引き渡す先物取引も導入されていました。ほとんどの人々は、現物を将来引き取るためではなく、それを期限までに転売して利鞘を稼ぐことだけを考えていたため、投機性は強まっていきました。当時のオランダでは、このような売買行為は「ヴィントハンデル」と呼ばれていました。これは、空気取引、今日でいう「空（から）商い」のことです。

こうしたチューリップ取引には、最初から問題が絶えませんでした。売買契約の履行を保証する会員業者制度はありませんでしたし、先物取引の現物引渡しの時の球根がはたして契約通りの品種であるのかどうかは、花が咲くまでわからなかったからです。こうした事態に対処するために、新たな法律が制定され、チューリップ関係専門の公証人制度が設定され、また、取引が許される地域も指定されました。バブルが膨らむにつれ、制度の方もそれなりに整備されていったわけです。

チューリップ狂はこうして次第に準備されていきました。



©MASARU NAGAI/amana images

◆チューリップ狂の実態◆

ドイツでは30年戦争が続いていた1630年代の半ばになると、貴族だけでなく、市民、農民、職人、水夫、従僕、召使、さらに煙突掃除人や古着屋のおばさんといった一般大衆までもが市場に参加するようになり、投機熱は一気に高まりました。一般大衆の参加がバブルの条件であるというのは、今も昔も変わりません。外国人もこの投機に加わり、オランダに資金が流入してきたため、日常品や土地、建物、馬と馬車、その他のあらゆる奢侈品の価格も次第に上昇していきました。こうして、物価の急速な上昇が起こったのです。

球根の価格は際限なく値上りし続け、この相場に人々が付いていくために家屋敷を担保にした借金で買いに回り、それが相場をさらに引き上げました。ちなみに、1636年には、球根1個は、馬と馬具をすべて備えた2頭立ての新品の馬車1台と交換されるまでになっていました。当時の馬付馬車1台が、どの程度の価値を持っていたかは定かではありませんが、現代の乗用車以上に高価な品物であったことは間違いないでしょう。まさにバブルの膨張です。

「バイスロイ」という球根1個を手に入れるためには、牡牛4頭、豚8頭、羊12頭、ライ麦4車、小麦2車、ワイン2樽、ビール4樽、バター2樽、チーズ500キロ、家庭用品一式が必要でした。一体、現在の貨幣価値でどのぐらいになるか見当が付きません。また、ある水夫が、船荷の中にあり、たまねぎだと思って間違えて食べてしまった「センパー・アウグストゥス」という球根の値段は、バイスロイ種の約2倍の現金に加え、馬付馬車1台の値が付いたというから驚きです。

さらに、当時の熱狂ぶりを伝えるこんなエピソードもあります。ハーグ市にすむ靴屋は自宅のチューリップ園で、品種改良の苦労を重ねた結果、ついに黒いチューリップを咲かせることに成功しました。この話をどこかから聞き付けたハーレム市の栽培業者がこの靴屋を訪れ、この球根を買い取りたいと申し出ました。この靴屋は150ギルダーという高い値で売ることができたのですが、売れてホクホク顔の靴屋の目の前で、この業者は、今買い取ったばかりの球根を地面に投げつけ、踏み潰してしまいました。子供のように大切にしてきた球根

■西部　忠（にしべ まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書『市場像の系譜学』『地域通貨を知ろう』他。

をグシャグシャにされて茫然自失の靴屋に対して、この栽培業者は平然とその理由を述べたのです。実は自分も黒いチューリップの球根を1つ持っているので、その希少性を守るためにその球根を処分してしまわなければならなかったのだ、と。何倍、いや何十倍の価格で売れたにちがいないことを知ったこの靴屋はショックで死んでしまったということです。

◆そして、その終わり◆

このお祭騒ぎのような投機熱が最高潮に達したとき、その終わりもやってきます。1636年になって、一部の人々が売りはじめたのをきっかけに、売りが売りを呼ぶパニックが発生しました。価格はたちまち奈落の底へ落ちていくように暴落し、屋敷や土地を担保に借金をしていた人々、あるいは球根を担保に借金していた人々は、破産に追い込まれました。こうして、当時、世界の商業的中心地であったオランダの経済は深刻な打撃を受けることとなりました。

興味深いのは、このチューリップ狂がオランダの経済的な繁栄期に起こっているということです。この後、オランダは1652年から英蘭戦争で海上権と植民地を争いましたが、結局、イギリス優勢のまま講和しました。オランダの軍事的覇権と経済的繁栄の衰退がここから始まったのです。1929年のニューヨーク株式市場の大暴落も第一次大戦で世界最大の債権国になったアメリカ経済の繁栄の絶頂期に起こっています。1990年の東京株式市場における大暴落も、1955年から約35年続いた日本経済の長期的繁栄期の頂点だったといえるでしょう。世界最大の債権国であったというのもアメリカと同じです。

オランダでは、このチューリップ狂の100年後に、「夢よ再び」とばかりにヒヤシンス狂が起こりました。チューリップの球根に続く二番煎じの投機の対象としてなぜヒヤシンスの球根が選ばれたのか定かではありませんが、この時オランダはすでに下り坂にあったため、バブルの大きさも前回ほどではありませんでした。ヒヤシンス狂では、前回のチューリップ狂事件の記憶がまだ新しく、さまざまな警告が出されていました。にもかかわらず、同じ投機熱が再発したというのは、なんだか今回のITバブルに似ています。これは、世代が変われば人は同じ過ちを繰り返すという命題を見事に証明しています。バブルが現在もなくならないのは、人間が昔からそれほど変わっておらず、人間が歴史から学ぶことは難しいからなのでしょう。

経済伊曾保物語

西部　忠

A B C D

第❾回　バブル伊曾保物語Ⅲ―ロー・システムの成功

◆伊達男ジョン・ロー◆

オランダに続き、18世紀の初めには、フランスとイギリスでバブルが発生しています。フランスでは、スコットランド出身のジョン・ローという男が主人公でした。ジョン・ローの生み出したバブルは、彼が考案した金融システムがある時期までうまく作動した結果、発生したのです。

ローは、1671年に、金細工師の息子として生まれました。当時の金細工師は、通貨の保管・貸付業務、今でいえば、銀行のような業務を行っていました。ローは、若くしてロンドンに遊学し、銀行や金融についての事柄も勉強しました。しかし、彼はまたプレイボーイ、無類の酒好き、賭博師であり、「伊達男ロー」として知られていました。

ところが、この遊学は1694年のある事件により中断されることになります。ローはたくさんの愛人を囲っていましたが、もう一人の伊達男ウィルソンの妹がローの愛人をからかったため、ローがウィルソンに決闘を申し込み、剣で相手の腹を突き刺し殺してしまったのです。ローは逮捕され有罪となって刑務所送り、しかしその後、脱獄して大陸へ逃れました。彼は国家財政に興味を示し、アムステルダムの金融街を歩いては、金融制度の研究を進め、1705年には『通貨および商業の考察』という小冊子を刊行するまでになります。彼はそこで、貨幣の不足がスコットランドの不況を招いているから、土地を担保にして通貨量を増やすべきであり、そうすれば、雇用を刺激し、国富の増大に繋がるという見解を述べています。これは、後のケインズの主張に似ています。しかし、あまりに時代に先駆けすぎていたのか、スコットランドでは受け入れられなかったので、大陸のサボイ家にも進言しましたが、やはり無駄でした。その一方で、ブリュッセル、ウィーン、ローマを旅して、賭博や投機で相当の財産を築きあげました。

◆ローの錬金術◆

フランスでは、ルイ14世の死後、ルイ15世が王位を継承しましたが、彼が5歳と幼少であったため、オルレアン侯フィリップ２世が摂政につきます。当時のフランスは、17世紀以来の長期不況下で、貨幣の不足と物価の下落にあえいでいました。また、前ルイ14世による相次ぐ侵略戦争への出費、ベルサイユ宮殿での放蕩三昧、賄賂の横行で国庫はすでに大きく傾いており、財政赤字が30億リーブルをも超えていたのです。こうした苦境の中で、国家財政の建て直しを図りたいフィリップ侯には、ローの構想に耳を傾ける理由が十分にあったといえるでしょう。

ローは、いくつかの論文と覚書で、銀行券発行の有効性を財務当局者に説きました。その甲斐あってか、1716年５月、銀行券を発行する個人銀行「ジェネラル銀行」設立の許可が与えられました。銀行の頭取にはローが就任し、彼の邸宅の１階を店舗としました。資本金は600万リーブル、その25％が現金で、残りの75％が額面の22％にまで値下がりしていた国債で払い込まれました。

ジェネラル銀行の銀行券は、銀貨への兌換を認められており、交換比率は紙幣発行日の相場によって決められていました。また、政府の経常支出や国債の引受のためにも用いられたことにより、信用度が増し、広く流通することとなりました。ローは、この銀行券が広く流通するにともない、貸出金利を30％から、６％へ、そしてさらに４％へと引き下げ、民間の高利貸しを締め出すことに成功します。資本金600万リーブルの資本金をもとに、その10倍の6000万リーブルの貨幣が発行されました。この銀行券には利息が付くだけでなく、その信用が極めて高く受領を拒否する者がいないので、銀との兌換レートを15％も上回るプレミアムが付くことになりました。このため、束の間ではあったとはいえ、フランス経済は刺激され活況を呈しました。

ここまでがローの成功物語です。しかし、これは彼にまつわる話のほんの序の口にすぎません。

◆「ロー・システム」とは？◆

ローにとって必要だったのは、銀行券発行の裏付けとなる現金収入源でした。といっても、この現金収入源は、実際に収入を稼ぎ出していなくとも、人々がそう信じていてくれさえすればよいのです。そうすれば、破綻寸前の国家財政を再建することも夢ではありません。そして、それを可能にするためにローが考え出した巧妙な方法こそ、後に「ロー・システム」と呼ばれることになった当のものなのです。それは、国民を欺き、彼らの持っている現金を絞り取り、国家債務を解消しようという、いってみれば国家規模での詐欺行為を完成させる企てであるといってもいいでしょう。

具体的にはこうです。莫大な利益を生み出す（と考えられている！）特権会社を設立し、そこが王立銀行が発行する銀行券を引き受けて、これを国家に貸

し付けます。政府はこれを財政支出や債務償還金として使用しますから、銀行券が市中に出回ります。さらに、こうして流通する銀行券を、この特権会社の株を上場することによって吸収してしまおうという二段構えのスキームです。確かに、この特権会社の予想収益を人々が信じさえすれば、銀行券と引き替えに同社の株券を喜んで受け取るでしょう。ただし、この株券の価格が上昇している間は、という留保条件が付きますが。

当時、フランスが新大陸に有していた植民地は「ルイジアナ」と呼ばれており、メキシコ湾から西はロッキー山脈、北は五大湖までに達する広大な領土を誇っていました。当時の入植状況はまったく悲惨という他ないもので、北米の厳しい自然と黄熱病・マラリアなどの風土病により、入植者の多くが1年もたたないうちに死んでしまったといいます。いつの時代も一般大衆は未知の世界に対してバラ色の夢を描くものですが、ルイジアナには金、銀、エメラルドなど貴金属や宝石が大量に埋蔵されていると信じ込んでしまう人々は当時決して少なくなかったのです。「危険があるからこそ、得られる利益も莫大である」という、もっともらしいイメージが欲深い人々の心をとらえることに見事に成功したわけです。

◆「ルイジアナ会社」の株狂乱◆

ローの考えは、このルイジアナに埋蔵されているにちがいない金鉱の探査や採掘を目的とする「ルイジアナ会社」を設立し、この株式を上場しようというものです。本当に金が発見されるかどうかが問題ではありません。投資家がそれを信じて、発行株式を買ってくれるかどうかだけが問題です。政府はこの会社設立を認め、同社がルイジアナ領土を25年間賃借し、独自の軍隊を創設する特権を与えたのです。早速、ルイジアナ会社は、6000人のフランス人と1000人の奴隷を入植させることを決めました。

ルイジアナ会社は、当時普及していたタバコの栽培と販売の独占権を取得し、さらに、東インドや中国関連の企業を次々と買収しました。そして、社名も「インド会社」と変更して、フランスの外国貿易を独占していきました。また、このインド会社は貨幣鋳造権も獲得したため、瞬く間に世界最大級の企業となったわけです。

しかし、1株500リーブルで20万株売り出されたインド会社の株は、人々の疑念から1718年の暮れには半値まで下げていました。そこで、翌年、王立銀行は銀行券を3割増刷しました。その一方で、インド会社について、新たな買収、輝かしい事業展望といった投資家の気を惹くようなニュースが次々に流されました。実際、8月にインド会社は9年間の国税徴税権をも獲得することとなったのです。

■西部　忠(にしべ まこと)
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」「地域通貨を知ろう」他。

たちまち「ルイジアナ会社」ブームに市場は揺れ、株価は急騰を続けました。8月末には、当初販売価格の10倍である5,000リーブルにまで達し、10月には8,000リーブルまで跳ね上がりました。前年の安値で株を買っていれば、すでに32倍になっていたのです。ところが、相場は休むどころか、ますます過熱していったのです。さまざまな特権がインド会社に与えられる中で、株価はほとんど狂乱状態になりました。時期を逸した投資家がジェットコースターのような相場に飛び乗ろうと、30万人以上の人々がパリに押し寄せたといいます。キャンカンプア通りでは、カフェ、レストラン、街路など、ありとあらゆる場所がインド会社株の取引場と化し、誰彼構わず売買が行われるといった有様でした。

ローは、インド会社を実際に稼働するために、フランス人をミシシッピーへ移住させる計画をいちおう考えてはいたようです。しかし、当時、フランスからミシシッピーへ移住するのは、おそらく今火星に移住するぐらい困難と危険が伴うものと考えられていたといってもいいでしょう。応募してくるのは犯罪者や売春婦ばかりでした。こんな植民計画が成功するわけがありません。

インド会社の株は、結局、1719年の末頃に天井を付けました。この時の株価はなんと20,000リーブルというから驚きです。当初500リーブルで売り出された株が、わずか3年もたたないうちに40倍にまで膨らんでいたのです。

ローが編み出した国家債務の返済方法はまんまとうまく行きました。政府は年利3％の国債を発行すると同時に、その国債でインド会社の新規発行株の払い込みができると宣言しました。株価が上昇していれば、この国債の保有者は自ら進んで株と交換するにちがいありません。こうして、国の借金はいつしか単なる紙切れになる運命の株券にうまく化けてくれたのです。

ルイジアナ会社の株の売却代金も、ルイジアナ開発のためではなく、専ら政府の負債の返済に充てられました。王立銀行の銀行券は政府に対して貸し付けられ、政府はそれを経常支出や国債返済に使ったのです。人々の手に渡った銀行券は、さらにルイジアナ会社の株式の購入に振り向けられました。その売り上げは、さらに政府に貸し付けられます。こうして、銀行券の膨大な発行とその還流を通じて生じた信用膨張は、あたかも風船のように膨らみながら、人々の持っていた現金をバブル化した株券に置き換えてしまったのです。

このロー・システムがいかに崩壊したか。それは次回お話ししましょう。

経済伊曾保物語

西部　忠

第⑩回　バブル伊曾保物語Ⅳ
—ロー・システムの終焉とサウス・シー・バブル事件—

◆ロー・システムの終焉◆

さて、前回からの続きです。ロー・システムが作りだしたバブルはいかにして崩壊したのでしょうか。

ロー・システムによるインド会社株の高騰がいつまでも続くはずがありません。インド会社に対する人々の信用が崩壊すれば、このロー・システムも終りを迎える運命にあったのです。

1720年にその時がやってきました。どの場合も、バブルの崩壊は、機が熟すれば、ほんの些細な事をきっかけにして始まるものです。その年の1月、コンデ王子とコンティ王子はインド会社の株を売却して換金しました。3台の馬車が金貨を積んで行ったといいますから、相当の額だったにちがいありません。この噂を耳にして恐れをなした投資家たちは我も我もと株の売却に走りました。

これに対して、リーブル紙幣がさらに増刷されましたが、金への兌換を要求する人々が増えるにつれ、その価値は下落して行きました。また、500リーブル以上の金銀の所有を禁止し、100リーブルを越える支払いは紙幣によるべきという命令も出されましたが、これは逆効果で、信用危機をかえって広げただけでした。いわば株や紙幣にはもはやなんらの価値もないことを宣言してしまったようなものだからです。あちこちに金銀のブラックマーケットが立ち、換金を求める人々の列が以前にもまして長くなりました。

失墜したインド会社の信用をなんとか回復しようと、一芝居打たれたこともあります。ある日パリで大量の浮浪者が雇われ、今からルイジアナへ金を採掘しにいくかのようにシャベル片手に町の大通りを行進させました。これは、一時的には功を奏しました。しかし、何週間もして、彼らが元の浮浪者に戻っているのが目撃されました。しかも、金がまったく届いていません。このことを知って、人々の不安は一気に広がります。王立銀行には、銀行券を金貨へ交換するよう求める人々が殺到しました。いわゆる取り付け騒ぎの発生です。この年の7月には、1万5000人以上の群衆が王立銀行の前に押し寄せ、16人が圧死するという惨事も起こったほどです。

結局、1720年6月17日、王立銀行券の兌換が停止されたため、株は転げ落ちるように大暴落し、他の多くの商品の価値が崩壊することになりました。その結果、経済活動は鈍化し、恐慌が発生したのです。

フランス財務総監にまでのし上がり栄華を究めたローも、いまや万人から呪われ、怒りの的となりました。身の危険を感じたローは、ついにオランダへ亡命するしかなかったのです。イギリスに4年住み、その後、イタリアのヴェネツィアへ渡り、そこで一人寂しく、誰にも顧みられない余生を送ったということです。

このロー・システムの崩壊のせいで、フランス人は銀行をその後長い間、信じなくなってしまったといいます。

◆サウス・シー・バブルの夢◆

フランスでロー・システムがうまく行くかに見えた頃、イギリスでもそれを真似して国家の債務を奇跡的に返済しようという計画が練られていました。当時のイギリスはフランスとの長期にわたる戦争のために巨額の借金を抱えていました。国が債務返済に苦しんでいるのは、先ほど見たフランス政府と同じですが、イギリスではこの債務をジェントリーや貴族といった地主階級が強く嫌っていたという点で違います。というのも、政府の借金は自分らが所有する土地を担保として借入れられたものであると考えられていたからです。政府債務の中でも特に99年間という超長期の年金公債は、所有者の同意なしに完済できない仕組みだったので、政府を悩ませていました。そこで一計を案じたのです。

大蔵大臣を中心とする財務担当者は、当時、「サウス・シー（南海）」と呼ばれていたカリブ海諸島、スペイン領中南米、太平洋諸島との貿易独占権を持つ会社設立を構想していました。この「サウス・シー・カンパニー（南海会社）」は悲惨な運命をたどり、後に「サウス・シー・バブル・カンパニー（南海泡沫会社）」と呼ばれることになります。そして、ここから「バブル」という言葉が生まれたわけです。さて、元祖バブルの顛末は如何なるものでしょうか。

1711年、関連立法が制定され、南海会社は設立されました。南海会社は、政府債務1000万ポンドを引き継ぐ代りに、政府から南海の貿易独占権と年々の補助金を得ることになりました。

1719年には、さらに政府から各種の追加補助金と利権を与えられ、政府の残債を引き取るという条件で、新株の発行許可を申請しました。

1720年2月2日、新株式発行案が下院を通過すると株価は129ポンドから160ポンドへと急騰します。これが上院を通過すると、390ポンドまで一気に跳ね上がりました。4月には、役員会で10パーセントの配当が決議されたため、株価は400ポンドを超えました。あっという間に、株価は3倍以上にもなってしまったのです。

さらに5月には、一般大衆を対象とする初の公募が発表されました。ここには、例の年金公債をうまく引き寄せる次のような罠が仕掛けられたのです。募集期間の最初の一週間に年金公債を持ち込んだ者に対しては、一株375ポンドで割り当てられるというのがそれです。市場価格は、公募開始5日目まで495ポンドに吊り上げられており、公募のメリットは大きくふくれ上がっていました。そのため、残存していた年金公債の半数以上が株式と交換されたのです。

こうした投機的な株価上昇はなおも続きました。5月に550ポンド、6月に890ポンド、夏には1000ポンド寸前にまで達しました。人々がこれに次々と参加し、短期間のうちに大きな富を築いた成金も続出しました。

この当時、「バブル」という言葉は、株価が実質的な資産価格よりも異常に高くなっている相場の状況を表すものではありませんでした。アメリカ大陸西岸や南米といった地域の大部分では、スペインが領土と貿易に対する独占権を主張していました。したがって、イギリス政府が南海貿易の独占をこの会社に許可したにしても、貿易独占の見通しは極めて怪しいものでしかなかったのです。イギリスの国旗を掲げて海をわたる貿易船が、スペイン艦隊により撃沈され、海の藻くずとして消えてしまいかねないわけですから。こうした南海会社のいい加減な事業内容もさることながら、これを模倣し便乗利益を上げようと、それこそ実体のない「泡のような」会社が次から次へと設立されました。こうした正体の定かでない、いかがわしい会社のことを「バブル・カンパニー（泡沫会社）」と呼んでいたのです。

その事業内容は、ほとんど冗談としかいえないものが多かったのです。笑えるところでは、「永久運動が可能な車輪の製造」、「水銀を純銀に換える事業」、「英国中どこへでも出張サービスをする葬儀会社」など。極めつけは「最高の利益が期待される事業だが、その内容については後日まで発表を控える」というもので、「1株100ポンド、2％頭金支払、年100％配当保証」という条件が付いたこの会社の株には、1日あたり1000株もの購入申込があったといいます。こういった詐欺まがいの名目的な会社にも人々は大金を投じたため、実際、株価もあるところまで上昇しました。

1720年6月、ついにこれらの泡沫会社の設立を禁止する最初の「バブル法」が制定されました。ところが、こうした法律が議会を通過したのは、必ずしも無知でだまされやすい人々をこうした悪徳商法から保護するためではなかったのです。南海会社に多額を投じていた議員たちが、ただ自らの利益を守りたいがためでした。こうした泡沫会社が続々と生まれてくると、南海会社へ投資するものが少なくなり、株価が値上がりしなくなってしまうからです。

ご多分にもれず、ここでもこのバブル相場は一気に崩壊します。その原因が、インサイダー情報を掴んでいた投資家や目先のきく人々が売り始めたからか、あるいは、バブル法の効果が相場にマイナスに働き始めたからなのかはわかりません。何か小さなきっかけさえあれば、バブルは崩壊するのですから、その

■西部　忠（にしべ まこと）
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」「地域通貨を知ろう」他。

直接の理由を言い当てることはできません。いずれにせよ、相場は天井をつけた後一旦下がり始めると、つるべ落としのようでした。9月175ポンド、11月135ポンド、12月124ポンド……。人々の信頼感を回復するため、同社役員会は8月に次年度以降10年間5割配当を実施すると発表しましたが、もはや相場に何の効き目もありませんでした。株価は乱高下しながら急落し、結局、140ポンドで安定しました。これは高値の約7分の1の水準です。

◆バブルと天才◆

この相場に手を出した者の中に、万有引力の法則を発見した有名な物理学者であるアイザック・ニュートンも含まれています。彼は晩年、造幣局長官や王立協会会長などの要職を務めましたが、サウス・シー・バブルに遭遇してしまったのです。最初7000ポンド投資して倍になったところで売却して利益を上げたのに、その後、高値づかみをして結局2万ポンドも損しています。この金額は今の1億円以上に相当するといいますから、彼も相当痛手を被ったのでしょう。「物体の運動を測定できても、人間の狂気を予想することはできない」と語ったといいますが、ここには自省も込められているのでしょう。バブル相場の渦の中に飲み込まれてしまう時、彼のような天才ですらどれほど愚かな行動に出てしまうものかと考えさせられます。しばしばこのエピソードが引合いに出されるので、彼にとっては気の毒な話ですが。

経済学者の中で相場で財をなしたというものはそう多くありません。19世紀初めのイギリスの経済学者であるリカードは、経済学者になる前に証券業者として、あるいは株の相場師として、一時は、あのロスチャイルド家と張り合うほど活躍していました。リカードが事業をやめ経済学者になっていなかったら、もしかしたら、現代国際金融の一大勢力になっていたかもしれません。

また、今世紀のケインズも、第一次大戦後、相場の失敗で破産寸前の窮地に立たされましたが、死ぬまでに投機により一財をなしていました。しかし、これらは例外といった方がよく、本当は相場に手を出して痛い目を見た学者の数の方が多いはずです。こちらの方は大損しても人には話さないはずだから、歴史に残っているものは当然少ないからです。物価問題の研究者として名高い20世紀アメリカの経済学者フィッシャーが、1929年の大恐慌の時、株式相場で破産しかかり、大学より借金したのは有名な話です。天才であろうとなかろうと、人はバブルからそう簡単に逃れられないようです。

経済伊曾保物語

西部　忠

第⑪回　「仮想現実」としてのバブル

◆観念の自己実現◆

一体なぜバブルは生じるのでしょうか。まずはっきりしているのは、貨幣がなければ、北米ネイティブ・アメリカンのポトラッチのような熱狂的な贈与と大量破壊はあるにしても、おそらく、いままで見てきたバブルの物語のような一国単位の大規模な集団現象は起きないだろうということです。貨幣は、言葉のように、人間が他の人間と経済的コミュニケーションを行うために欠くことができない媒体でした。貨幣がなければ市場も存在しません。だから、貨幣を市場経済社会から取り去ることはきわめて困難なのです。貨幣によってあらゆるモノやサービスが市場で売買され、人間の心理や欲望が変わらない以上、バブルの問題は常に付いて回るでしょう。

では、バブルとはいったい何なのでしょうか。「裸の王様」における観念の自己実現という話を思い出してみましょう。王様は何も着てい「ない」のに、回りの人々そして自分すら立派な服を着ていると信じる（ふりをする）ことによって――みんなが信じているからそれに同調して盲目的に信じる（慣習）か、そう信じるふりをすることが自らにとって利益であると期待する（予想）かは別にして――あたかも実際にそれが「ある」かのような現実ができあがりました。そうした現実がさらに人々の信念を維持し強化します。これと同じく貨幣も、人々が、それが使われ続けてきたという慣習に従い、また、それが使われ続けるだろうという予想を抱くことによって、すなわち、人々が貨幣を信頼することによって、受領され続けます。そして、貨幣が実際に流通するという事実を通じて、今度は人々の信念が実現されます。信念と貨幣は、相互に他を支えることで自らを実現し、ともに経済的な「仮想現実」を構成しているといってもいいでしょう。逆にいえば、信念と貨幣は、どちらか一方が崩れれば、他方も崩れる運命にあるのです。

◆太陽黒点説◆

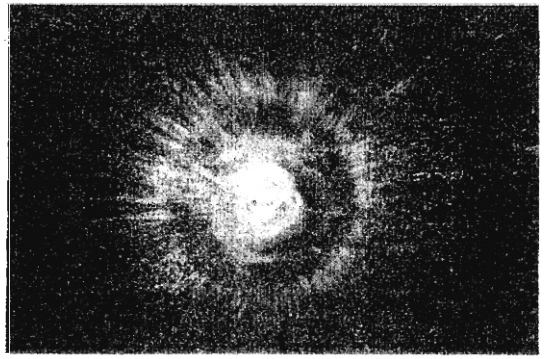
ここで、このような観念の自己実現のもう一つの例として「太陽黒点説」についてお話ししましょう。

限界効用理論の提唱者の一人であるイギリスの経済学者ジェヴォンズは、その晩年の1875年から82年に科学雑誌『ネイチャー』に何回か投稿しています。そこで彼は、太陽黒点数の増減と農業生産物価格の騰落に相関関係があることを統計データによって示し、10―11年の周期で増減する太陽黒点数は、景気循環に影響を与えているという理論を唱えました。太陽黒点数は太陽の輻射活動の活発さを表しますが、それが多い時には地球上へ降り注ぐ放射エネルギーが増大し、気温上昇などの気象変動から農業生産性が上昇することで穀物価格が下落するといった因果関係があると主張したわけです。これは、学会からは荒唐無稽な学説であるとみなされました。しかし、一見するとオカルト的なこの説も、すでにのべた観念の自己実現を考慮に入れて、次のように再解釈するならば、もっともらしいものになります。

太陽黒点数と穀物価格に因果関係があるかどうかとは別にして、多くの人々が「太陽黒点が増えると、農業の生産性が上がり穀物価格が下がる」という法則を信じるとすればどうなるでしょうか。太陽黒点が増えれば、穀物価格が下がるだろうという予想に基づいて、生産者が売り急ぎ、消費者が買い手控える（卸売業者が仕入れを手控える）結果、穀物価格は実際に下落するはずです。こうして、太陽黒点説が主張する命題の真偽はどうであろうと、それについての人々の信念によってその法則は自己実現され、現実に、太陽黒点の増減に応じて景気循環が起こってしまうというわけです。太陽黒点説は一つの極端な事例として、社会現象における観念の自己実現をものの見事に示しているといえるでしょう。そして、同じような現象が、貨幣やバブルなどさまざまな形で起こっているのです。

◆幻想と現実◆

このように考えてくると、文化や政治などに比べてずっとリアルだと思われている経済の世界においてすら、幻想・観念と現実・実在の間に明確な線を引くことが困難であることがわかります。むしろ両者は分離することができないというべきです。株価や為替相場について、生産性、企業収益、利子率など経済の基礎的諸条件（ファンダメンタルズ）から理論的に計算される価格は「ファンダメンタルズ価格」といわれます。バブルとは、市場の需給条件や投機の動向によって決定される市場価格がファンダメンタルズ価格を超過する部分として定義されることがあると前に説明しました。そうした考えでは、ファンダ



©Masato Tokiwa/
amana images

メンタルズ価格が「現実」であり、バブルは「幻想」であるということになるでしょう。確かに、バブルがはじけ飛び消えてしまった時点から振り返れば、バブルとは幻想であるように思えます。しかし、ではファンダメンタルズ価格が確固たる現実なのかというと、そうでもありません。なぜなら、ファンダメンタルズ価格が市場で実際に成立することがまれであるというだけでなく、そもそもファンダメンタルズと呼ばれる企業収益や利子率の計算を可能にするところの貨幣がすでに仮想現実であるからです。

日経平均株価は昨年11月に1983年の水準まで低下しました。これをマクロ的に見るならば、この20年足らずの間の上昇分は幻想だったといえるかもしれません。しかし、株式投資に失敗して資産を減らしたり、中には、破産して人生が狂ってしまった人もいますし、大もうけをして優雅な生活をしている人もいます。ミクロ的に見れば、バブルの崩壊は、全員の資産を平等に減らしたわけではないのであって、人々の間に所得の不均等な再分配をもたらしたことは紛れもない事実なのです。しかし、すべての基礎であるはずの貨幣自身が幻想であると同時に現実であるならば、バブルが幻想と現実の両側面を持つとしても、決して不思議なことではありません。

◆ハイパーインフレーション◆

ここでは、貨幣の仮想現実性はどのようにして現れるのかについて考えましょう。観念の自己実現が形成する貨幣という「仮想現実」が何らかの理由で壊れるならば、人々はその貨幣を疑い、それを受け取らなくなるでしょう。その時、月10%以上にも上る激しいインフレーション、すなわちハイパーインフレーションが起き、貨幣価値が累積的に下落します。紙幣はその時紙くずになってしまうでしょう。

ハイパーインフレーションは近代に登場した紙幣に取りついた病気とでもいうべきものです。最初にハイパーインフレーションに見舞われたのは、ジョン・

■西部　忠(にしべ まこと)
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」「地域通貨を知ろう」他。

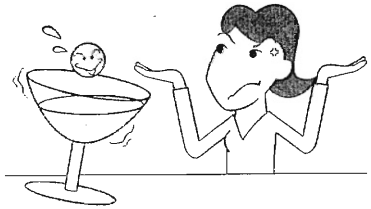
ローが発行した王立銀行券でした。インド会社株が暴落しロー・システムが崩壊した1720年に、物価は2倍以上に跳ね上がりました。ハイパーインフレーションは、特に戦争や革命により社会や政治が不安定になると発生することが多いといえるでしょう。アメリカの独立戦争時の大陸紙幣、フランス革命時のアシニア紙幣、第一次大戦後のドイツのレンテン・マルク、ソ連崩壊後のロシアのルーブルなどがそうですし、内戦時のユーゴスラビアでも月平均千数百パーセントも物価が上昇しました。

ハイパーインフレーションが起きると、貨幣も市場も消滅して物々交換の世界が生の姿で現れるのでしょうか。私の考えでは、そうはなりません。ハイパーインフレーションにより、ある国家貨幣が凋落したとしても、その時必ず別の貨幣が現れるはずです。取って代わるのは、タバコや穀物のような現物貨幣か、貴金属か、金貨のような正貨か、国際通貨であるポンドやドルか、はたまた、地域通貨や企業通貨かはわかりませんが、貨幣や市場が消滅するということはないでしょう。もし世界に貨幣がただ一種類しかなく、それがハイパーインフレーションに襲われれば、貨幣が消えるという事態は「論理的」には考えられそうです。いまグローバリゼーションを通じてドルが世界通貨としての覇権を強めているので、ドルにそのようなことが起きれば、資本主義市場経済は崩壊すると予想する人もいます。しかし、当面はドルだけではなくユーロや円・元が存在していますから、国際通貨の多極性は失われないでしょう。また、いま数多くの企業通貨や地域通貨がリアル空間で、あるいはサイバー空間上で生まれつつあり、今後もさまざまな貨幣が生まれ、進化していくはずです。とすれば、百歩譲って、いつか世界銀行によるグローバル通貨が発行される時がくると仮定するにせよ、このような貨幣の多種多様性は残るのではないでしょうか。ホモ・サピエンスが生物界の「頂点」に立った後も、生物種の多様性が維持されており、それがきわめて重要な役割を果たしているように。

ハイパーインフレは、貨幣がある種の仮想現実であることをわれわれに教えてくれます。しかし、それにより、私たちは夢から覚めてうつつに戻るのではなく、一つの夢うつつから別の夢うつつに移行するにすぎないのです。バブルもまたある種の仮想現実ですが、たとえそれがはじけても、私たちは繰り返し別の仮想現実の中にいることを知るべきでしょう。

ちょっと小話

Booming! 景気がいい



毎年、ブームはいろいろあるが、誰が考えても今世界中で注目を集めているのは、中国である。とくに上海の勢いには目を見張るものがある。先週上海を再訪した。再訪というと何かのんびりした感じがあるが、まるで未来都市のような景観と明るいネオンに飲み込まれてしまいそうであった。(高速道路の裏側に紫のネオンをつけているのは世界広しと言えども、ここぐらいであろう) 2003年4月にはリニアモーターカーが運行開始という。中国に行ったのは7年前が初めてでそのときは北京、ハルビン、大連であった。一昨年、初めてAPEC直後の上海に行った。この10年、すべてが濃縮されて進んでいる。日本で徐々に普及してきたものが2、3年で一気に入ってきている。隣のホテルのロビーに新製品としてプラズマテレビと電子レンジが同時に一段高い所にディスプレイされていた。なんだか奇妙。

この凄まじい変化の中で変わってないのが、店員の多さとサービスの悪さ。これは7年前と変わってない。従業員が多いのは、それで雇用を創出しているのだからいいのだと中国政府のような言葉がよぎる。それにしても多い。邪魔なくらいである。では接客がいいかというと自分たちだけでべらべら喋っていて、客には愛想が悪い。

バイキングスタイルの朝食中に一皿、食べ終わってフォークを置こうと思った瞬間に手が出てお皿を下げる。せっかちな私でさえも、「もう1分待ってくれない?」と思う。タイミングが悪すぎる。使うつもりでちょっと置いたきれいな皿をもう下げようとしている。一方、コーヒーのお替りを頼むとこんどはカップごと、奥に持っていってそれに入れてまた持ってくる。これを丁寧というのか。

友達が上海の某ホテルの総支配人をしていることがわかり、一晩、人気スポットの店に連れていってもらった。日本の雑誌にも紹介されている場所でなかなかすてきだ。カウンターに座って前にずらっと並んだグラスを見る。洗っているが磨いてない。カクテルを頼む。十分シェークしない。カクテルが私に差し出される。揺れて少しグラスの持つ手のところにこぼれる。拭かない。謝らない。総支配人の友いわく「職業病みたいでこんなときに悪いけどさ、この店はマネージャーの問題だね」と。中国でサービスを教えるのは「骨だ」そうだ。

ちなみに、一流ホテルでは従業員が英語と日本語を両方話す。上海の英語学校と日本語学校もブームである。職が目の前にあるからだ。ちょうどその日の上海の新聞に大学新卒の就職率は89パーセントで、まだまだあると書いてあった。

どう考えても、この街は資本主義としか思えない。むしろ、未だに「同じように」とこだわっているどこかの国のほうが、よほど社会主義である。2008年のオリンピックと2010年の万博を前に、どこまで伸びるか脅威である。それまでにお願いだから、接客を何とかしてほしい。

経済伊曾保物語

西部 忠

第⑫回 スペキュレーション──投機と考察としての

「バブル伊曾保物語」で見たさまざまな事例でバブルが生じたのは、チューリップのようにある程度の種類と量があって転売が可能な希少財か、株式などの有価証券でした。前者に相当するものとしては、このほかに土地、絵画、骨董品があげられるでしょう。後者には、転換社債やワラント債、そして、近年では、外国為替や金利の先物、オプション、スワップといったデリバティブ（金融派生商品）も含まれます。これらの商品がいわゆる“スペキュレーション（投機）”に関わるものであることは一目瞭然です。

◆バブルと投機◆

では、投資と投機の違いは何でしょうか。これらを区別するのは難しいですが、一応次のように言えるでしょう。投資とは、モノやサービス（流通や情報に関わるものも含む）の生産から生じる長期的・経常的な利潤や所得を期待して行われる企業的行為であり、投機とは、市場価格の変動を利用することにより転売から売買差益（特に短期的な）を獲得しようとする商業的行為である、と。どちらも必要資金を金融機関から借入れたり、資本市場で調達することにより行うことができますが、その目的や対象期間が異なります。バブルは、投資ではなく投機によって生じる現象だといえるでしょう。

フリードマンのように、投機こそ価格の自動調整作用、つまり「見えざる手」の働きを高めるものであるから、社会にとって極めて有用な経済活動なのだと主張する経済学者もいます。投機が「安く買って高く売る」ことであるとすれば、それは、市場価格が理論的な均衡値より低いときにはそれを引き上げ、高いときには引き下げる結果、市場価格を速やかに均衡価格へと引き戻すに違いない、というのがその理由です。かつてフリードマンは、ポンドの為替投機で一儲けできそうな状況がやってきた時、必要資金の借入を申込みに行きました。ところが、銀行で「それはジェントルマンのすることではありませんから」と丁重に断られて腹を立てたといいます。「社会に貢献する良き行為を理解しないとは何事か」というわけです。この話には、これを聞いた彼の先生から彼は自

分の弟子であるといってはならないと言われたという落ちが付いています。ともあれ、投機は常に需要と供給のギャップを解消して価格を安定化させるといえるのでしょうか。

投機家とは、価格が均衡値より高いか低いかに関係なく、それが将来高くなると予想されるならば、まちがいなく買うというような人々です。そのように予想する投機家が市場の大勢を占めている限り、あの観念の自己実現の論理が作動して、価格は実際に上昇します。強気相場のためのいろいろな理屈が考えられ、さまざまな価格の分析手法が駆使されます。また、相場を引っ張る先導者が現れ、他の投機家が追随することもしばしばです。価格の上昇は一本調子ではなく、いろいろな材料が出るたびに、時に激しく時に緩やかに騰落を繰り返しますが、ある程度価格が上昇してくれば、当然、一部の投機家は「そろそろヤバイ」と弱気になり売り始めるでしょう。しかし、それ以外の多くの投機家が一群となって買い進んでいけば、この強気相場は維持されます。この場合、価格は均衡値に収束するのではなく、そこからどんどん離れて上昇していきます。このように乖離が増幅されていく正のフィードバック過程は、何らかの原因で人々が一斉に弱気に転じない限り続いていくのです。ブームがバースト(破裂)へと反転するとき、バブルがはじけます。これこそ、観念の自己実現の論理の崩壊に他なりません。

ヘッジファンドの雄として有名なジョージ・ソロスも、このような現象を「相互作用性」という概念で説明しています。「相互作用性」とは、将来の予想に基づく現在の決定とそれが創り出す将来の事象が互いに影響しあうことを意味します。この相互作用性によって予想が自らをますます強めていく傾向にあるときには、金融市場は暴騰または暴落へ向かうので、決して均衡へ収束しません。彼は、相互作用性が働く金融市場はこのように不安定であり、均衡という概念では理解できないと考えました。

このように、投機は、価格を安定化するよりも乱高下させる傾向があります。もちろん、投機がバブルの形成と崩壊を通じて価格を均衡値へ接近させると強弁できなくはありません。しかし、均衡という考え方そのものに疑問がある以上、あまり説得的ではありません。少なくとも、フリードマンのように、投機は社会貢献だと、胸を張って言うことはできないでしょう。

◆美人投票◆

投機を別の側面から考えるために、ケインズの「美人投票」の理論を見てみましょう。ケインズは『一般理論』の中で、投機(「玄人筋の投資」)とは、長期間にわたる投資の予想収益を予想するのではなく、むしろ2、3ヶ月先の慣行的な評価を予想すること、いわば、仲間を出し抜き、群衆の裏をかき、人にババをつかませることだと定義した上で、それを次のような「美人投票」に喩えています。

美人投票とは、新聞に掲載された100人の写真から読者が美人だと思う人を選んで投票し、最も多く得票した平均的な「美人」に投票した人々に賞金が与えられるというものです。賞金を得るためには、自分の好みに基づいて投票しても、美のイデアに基づいて投票しても、意味がないことはすぐにわかるでしょう。人々を出し抜くためには、人々が平均的に好む美人とは何かを予想しなければなりませんが、他の人も同じように考えるでしょうから、人々の予想を予想しなければならなくなるからです。しかも、さらに先を読もうとすれば、人々の予想の予想を予想しなければならず、この予想の高次化はどこまで行ってもきりがありません。重要なことは、この投票で決まる「美人」とは、自分の審美眼にかなう女性でも、現代的美人の基準に一致する女性でもなく、単に最も多く得票した「人気の高い」女性であるにすぎないということです。したがって、群集心理を群衆よりもよりよく予測することが成功の鍵となります。このような状態では、人々の予想は確固たる基準を持ちえず、お互いに相手の投票を予想して投票するため、その結果は極めて移ろいやすいものになります。そして、インカムゲイン(配当や利子)よりもキャピタルゲイン(売買差益)を追求し、市場における人気に一喜一憂する素人投機家が多数を占めるようになれば、金融市場は、ちょうどこの美人投票のように不安定になるのです。

『一般理論』を書いた1930年代のケインズは、イギリスよりアメリカにそのような傾向が顕著であると考えました。ペンションファンドやヘッジファンドが短期的な投機をボーダレスに行っている今日のグローバル資本主義では、先進諸国のあらゆる金融市場がそのようになっているといってもいいでしょう。金融的不安定性がしばしば資本逃避という形をとって現れ、実物経済を直撃して不況や失業をもたらすのはこのためです。

◆月と生チーズ◆

投機が起きるのは、言うまでもなく、人々がより多くの貨幣を稼ぎたい、保有したいと思うからです。しかし、人間にそうした貪欲さが本来具わっているのでしょうか。例えば、自分が必要とする以上の大量の食料も、それが腐ってしまえば何の意味もありませんから、そんなに多くを所有したいと思うことはないはずです。むしろ、自分が欲しいモノを好きな時に手に入れるには貨幣が必要であり、それゆえ、貨幣があたかも普遍的な富として存在するからこそ、人間はより多くの貨幣を求めるのではないでしょうか。モノの売買から利益を

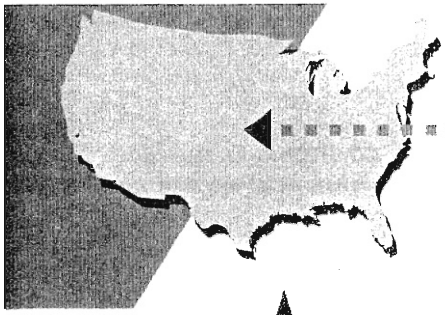
■西部　忠(にしべ まこと)
1962年生まれ。93年、東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。現在、北海道大学経済学部助教授。
専門は進化経済学、地域通貨論。著書「市場像の系譜学」「地域通貨を知ろう」他。

得ようとする投機は、貨幣がある限り、それに絶えず影のようにつきまとうのです。

マルクスは、商品生産が一般的な資本主義経済では、貨幣は必ず発生し、それは価値増殖する資本になると考えました。それは、人間が貪欲だから金儲けを行うのではなく、貨幣があるから人間は貨幣を増やそうとするのだということに他なりません。他方、ケインズによれば、私たちは、過去の予想が絶えず覆されながらも、将来を予想しなくては行動することができません。そして、何が起こるかわからないがゆえに、確率的にも予想できないといった不確実性は常に存在しており、人々がそのことに不安を覚えるからこそ、貨幣を保有しようとする「貨幣愛」が生じます。その時、貨幣は、その価値の増減にもかかわらず、かろうじてそれを頼みにすることができるという意味で、「現在と将来を結ぶリンク」になるわけです。

マルクスとケインズでは、貨幣にたいする見方は異なりますが、両者とも、貨幣は取り除くことができず、しかも、それが投機をもたらすとともに、バブルの崩壊に続く恐慌や不況の中で人々が追い求めてしまう不可避の現実、いや、“仮想現実”であると考えている点で一致しています。また二人とも、思想が時間をかけて社会を変えていくということを深く信じていました。マルクスは、貨幣をモノを生産するのに必要な労働時間を表示する労働貨幣に置き換えるという考え方を、ユートピアであると繰り返し批判しました。とはいっても、一般に信じられているように、貨幣のない社会主義計画経済こそ理想社会であると考えていたわけではないようです。また、ケインズは「人々が月を欲するために失業が生じるのだ」と表現しました。「月」とは、その生産が制限されている一方、それに対する欲望を抑制できないものの喩えです。人々に生チーズが月であると信じ込ませ、生チーズ工場すなわち中央銀行を国家の管理のもとにおけばよいというのがケインズの失業救済策でした。これは「通貨管理制度」に他なりません。現在、ケインズ的な金融政策も行き詰まっているように見えます。しかし、「月」という崇高なものを、ミルクさえあればだれでも作れる「生チーズ」という世俗的なものに置き換えるというアイディア自体は、以前にお話しした地域通貨や企業通貨のような形で生かせるかもしれません。私たちが貨幣という仮想現実から逃れられないとすれば、貨幣とそれが形作る市場をどのようなものに変えていくことができるのか、また、何が望ましいのかについて、いま一度“スペキュレーション（思索、考察）”してみるべきでしょう。

（「経済伊曾保物語」は今月号で終了いたします。）



That's News to Me

佐藤昭弘

12 On Writing 2

2月号では良い英文を書くための「読書」について述べました。今回は、それではどのような点に留意したら良い文章を書くことができるのかについて、述べたいと思います。

言語はコミュニケーションの手段である以上、やはり解りやすいことが重要です。特に忙しい現代では、何回も読まなければ解らないような難解な文章は好まれません。簡潔かつ生き生きとした「輝く」文章を書くことが大切です。これは作家や新聞記者など文章を書くことを職業としている人のみならず、例えば、今日の国際社会でのビジネスで、外国の会社とコミュニケーションをする場合でも同じです。正式な手紙のみならず、Eメールでも、きちんとした正確な文章で書かれていれば何らの誤解を生むこともなく、ビジネスも円滑に進むはずです。

英文を書く上で一番重要なことの一つはやはり文章の明快さ、Clarityでしょう。自分の考えやアイデアなどを他の人に誤解なく伝えるためには、やはり文章がClearでなければなりません。私がアメリカの経済通信社の記者をしていた時、日本銀行の友人から、日銀総裁の重要な仕事の一つは「あいまい」であることだ、と言われました。半分冗談だったのですが、確かに総裁会見が終わり、メモを見ると何を言ったのかさっぱり解らず、広報課のスタッフに「総裁は何をおっしゃったのでしょう」などと記者皆でこぞって聞いたことが時々ありました。確かに日銀総裁はその立場上、はっきりものを言って為替市場などに大きな影響を与えるのを避けるため、「あいまい」であることが大切なことは解ります。これはもちろん、話し言葉の場合ですが、このような特別の場合を除いて、書く場合でも文章が明快であることは肝要です。

例えばまったく架空ですが、次のような文章があるとします。

The Bush administration, in association with Britain and other U.S. allies and pursuant to a U.N. resolution which demands that Iraq renounce its weapons of mass destruction, appears ready to proceed with plans to attack the Middle East country even before the U.N. Security Council completes its task of analyzing the report Iraq has submitted on its weapons program